

ムヌガツタイ



辺後地伝説から、左が辺後地拝所の写真
上が物語りのイメージ

発刊にあたって

人間が他の動物と違うのは、獲得した知識、技術、知恵を文化遺産として積み上げ遺してきたことが挙げられよう。そのことよって人類の文明は、世界第二次大戦後 急速に加速度的に発展してきた。特に、科学技術の発達が突出し、環境問題や精神文化がつかず、影の部分が驚異になってきている。

人間は、忘れる動物である。それを補ってくれるのが文字である。

与論島であったことは、与論独自の歴史、文化、出来事、体験として私どもが書き残していかなければならないと考えた。個人が得た情報、体験、知恵、思想が、その人が亡くなるとともに消えてしまった貴重なものが数多くあったと思う。

その発想から、本書は個人からそれらのものを集めたものである。

従って、歴史的なもの、たとえば「アジニツチエー」について、人によって多少の違いがあるが、今となつてはそれを検証するすべもないからそのまま掲載した。

ムヌガツタイとして子供達をはじめ、気軽に読みただければ大きな喜びである。

平成十三年九月

目

次

一	アジンチェー様の物語	市来加平	一
二	辺後地築城伝	沖 家寿	十
三	診療所の思い出	田中裕子	十七
四	私たちのルーツを考える	竹内 浩	五五
五	シミヤーマ墓とクジリの話	内喜美村	五九
六	ミンキヤーマシ	白石直利	六一
七	落 石(ウテイイシ)	白尾康美智	六三
八	鉦山物語	竹下 徹	六五
九	子抱石	川上末吉	六八
十	竜宮亀捕り物語	大角龍矢	七十
十一	プカ取り物語	竹下 徹	七六

アジンチエー様の物語

市来 加平

シーシチャゴーヌ チンチブトオ アパナキタナガイ ミータナガイ

ウチンキタナガイ ヲウタナガイ

と歌があるごとく、ユミノ島（ユミノ島というのは、ユンというのは弓のことを方言でユンと言うから、ユミのことが本当です）の中央、朝戸部落の東はずれに、ニツチエーという地があり、そこにアジニツチエーを祀ったところがニイと唱えておる。

大早魃（かんばつ）でないかぎり、年中流れ通しの大井戸はシイシチャゴー。その井戸の南隣の小さい井戸、常に水の流れ通しする井戸を洗面所の井戸と。また、その東隣にある井戸を飲み水井戸というて、シゴーというのである。

その所に、その昔、ニージ（根地）の神、キヤーラが住んでおられた。キヤーラは、その昔は島主であったとのことであります。

その所に、五色の麗しい雲に乗った大弓を携えた神様が降りて、ヌル・女（神事を司る神官をヌルという）に面会し、この島はよく作物が繁茂しておる。小さいけれども大変よい島である。弓矢を取る、私の住まいする最もよい島であるとて、ユンヌ島・ユミノ島と

名付ける。この地方をニツチエー（漢字で書くと根津栄）と名付ける。屋号を「ニイ」と付けたとのことである。

　　ユンヌチユール島やイニクサヤアシガ、鍋の底中に五穀溜まる。

その後、何代キヤーラであったか知らないが、キヤーラの娘、ヌル神女が、裏の畑まわりに出掛けておるときに、にわか雨にあり、岩の下に雨がくれしたところ、夢かうつつか白雲に乗って、弓をまた携えた白髪の様が降りてきて、二人は話をしたとのことです。が、それから後、夫もないのに一人で身重となって、ついに男の子をお産したのであります。

その子は、頭の毛はぼうぼうと長く伸び、生まれながらにして歯が生えておったので近所の人より、不思議がられ、たまがられ、鬼子を産んだといわれるために、仕方なく雨宿りした岩の下に生き埋めにしたところが、その晩より、毎晩そこから天へ通ずる黄色の黄金色の光が発せられたとのこと。そこで、一週間位して行ってみると、生き埋めしてある土地は大きく裂けておるので、思い切って掘り出してみたら、元気でかえって太っておるので、これはお天の子であったと思つて、たとえ鬼になろうとも育てることにしたが、母のおっぱいより、鉄を煎じてその汁とシュトウギ（スーマシ）を好み、とかく普通並みの児童・子供とは違つて、知能、技量、特に腕力、力量全てにおいて少年にして大人を抜き

武術を好み、ついにその術を編出すに至る。手のつけようのない走る荒馬に飛び乗ったという。

ウナツタイよりニージ（根地）（按司根津榮神社の東側、桜の木のあるところ）までひと飛びしたとも言われる。成長するに至り、島の東の沖を通る怪しい舟の帆綱を射り切つて、東方の海を通らせないようにしたということである。

大きくなってから、沖繩の首里城に行き、王と面会をこうた。門番が怪しみ、入場を拒むに至る。自ら門番を打ち付けて入城。王の前に至る。三怪しみ、驚き、驚いたけれどもその人相といい、人格といい、また挨拶の模様等において、悪者ではないと考え、認め、打ち解けて対談するに至る。

まず、名前を問うに、名前はないと返答する。島と所を訪ねるとユミノ島のニツチエーの生まれと返答する。また王は、汝は武芸が少しできるようだが、何何ができるかと尋ねられる。剣と弓、馬術みな一人前、一通りは心得たつもりであると返答する。

王は、しからばまず、劍術の試合を臣下と立ち合わせる。選り抜きの者と試合させたところ、相手になるもの一人なし。全員一緒にかかったが、瞬く間にみな討ちすえられる。王、おおいに感心する。

そこで次に弓の問題となる。

汝の持参する弓は、はなはだ綺麗ばかりで、はなはだ弱そうである。弱いものしか引けないのかと言われて、アジンチェー（まだその時は名前はないが便宜上そう呼ぶ）が言われるのに、私は王様と戦うために来たのではなく、王様の臣下になりたいために参上したのであるから、私の本当の弓は持ってこなかった。いざ戦いの場になったら、その必要に応じて、遠矢でも、豪弓でも引くと返答したため、豪弓でも引けるとな、それなればここにあるこの弓は誰も引けないが、これを引いてみよと渡された。喜んで受け取って引いたら、その弓はぼきんと折れた。アジンチェーは心配して、王様に詫びたけれども、王様はますます喜んで、私の臣下とすることにす。職名をアジとなす。名前は地名のニツチェーとつけ、アジニツチェーと呼ぶ。

ユンヌ島より、ユミノ島より北方五島をアジのものとなす。おまえが持っているところの弓は、王が、私が最も好むといたので、アジニツチェーは、記念のために王にあげることとし、よく精勤することを約して故郷に帰った。

そこで妹のミジュルキはおおいに喜んだけれども、また一方、王に渡した弓はミジュルキの愛弓であったため、弓のことを考えたら悲しんだとのこと。そのためにニツチェーが弓を作ってミジュルキに渡したが、ミジュルキは引いてみて、元の自分の弓のごとくはないと惜しんだとのことであるが、永らく王様と親しかったとのことである。王もよく

善政をなしたとのことである。

かくして一年が経たかは知らないが、親王が薨じて後、子が王様の位を継ぐにあたり、あつというようないたずらに戦争を好み、次々に各按司を討ち滅ぼしたるを好みたれば、ニツチェーはその非を諫言したけれども、王、聞き入れず、かえって、汝は、王に意見するかと怒る。かくてはかかるような王の臣下には仕えたくないと自ら断り、故郷に帰りたいれば、ミジュルキ、しからば、私の弓は取り戻してこられるように言われるので、仕方なく、アジンチェーは直ぐに首里に渡り、城の裏の石垣に登り、屋根に飛び移り、屋根をはがして天井に移り、王の寢床の上に水をこぼし（本当はそれは水だろうか、実際は小便をしかけたんだろうが）、王は、鼠が小便をしたといつて、よそに寢床を移したために、その間にそこに飾られた弓を取って帰ったとのことである。

その後、故郷に帰って海、山の遊びをなして暮らしていた。そのうち沖縄より、舟倉（これは我々が三月三日に三月祭りをしている所）漁場に、沖縄より軍船が来たるとの通報により、舟倉の漁場より愛馬に鞭打ち、帰る。

はって歩いている子供が、箸を持ってきて、自分の昼時ご飯に突き立てたとのこと。アジンチェーはなんの気もなく、その箸を持って食事をすます。愛馬（ぐんば）に鞭打って出掛けようとすると、家来たちが後に従わんとする。それを止めて言うに、今度の戦いは

自分一人でいかにしてでも止めてやるが、かくなるうえはこの度幾度兵を派遣し、戦いを仕掛けてくるかわからないから、おまえたちは後片付けをして、家族たちをクンジャン（沖繩の国頭）方面にでも、あるいは北の島々にでも逃げ隠し、あるいはこの島にでも隠れるようにしなさい。

そして私の家族である、子孫である、また親戚であるということも言うてはいかない。また、私の友達であるということも部下であるということも言うてはいかない。そして私のことをおおいに悪口を言うように、悪評するようにしないでというと、無関係であるということを言わないというと、皆さんがこの島、ユンヌの島には、人は、人名は助からないから、よくよくそのことを善処を頼む。私のことは心配しなくてもよいから、後のことを頼むと言いついて、黒のかん馬に鞭打って駆け出したそうであります。

そしてピヤヌパンタにて見渡すに、先発の敵兵ども、上陸してピヤヌの坂下まで進軍してくるのを、あたるを幸い切り倒し、突き倒し進んでいく。次々と進み、ついに茶花にいく半分道に至る。その田んぼで血まみれになった刀を洗う。刀を洗っていて、刀の見えるみが切れておるのを、自分のかんざしを抜いてはめようとした。その時初めて兜を忘れて被っていないのに気付いた。直ぐに攻め来る敵を残らず切り払って茶花の浜辺に到るに船頭達ばかり残っていた。船頭達が命乞いをするによって、しからば那覇王に「『悪政を

改むるように』と伝えるように」と告げたら、それを約したので、そこでその場に休んだら、居眠りをもようし、居眠りからすっかり寝込んでしまった。その時、意地の悪い船頭がおり、船頭が「アジニツチェーが天の生み子ならば、我らも天の生み子である」と言つて、弓を取つて、アジニツチェーの頭のピチュルキを狙つて、矢を射込まれてしまったために、深い眠りのまま絶命したのである。

それで、ミジュルキの神様と部下たちが考えるに、「船頭達喜びいさんで首里城に帰つて行つて、王にその旨を告げても、王がかえつておおいに怒り、汝らごとき者に射殺せるアジンチェーではない。恐れたまげて帰つてきたのであろう」、「王様が信じないものだから、また改めて兵を派遣するに違いない」として、我らのアジンチェー様を、茶花港の北側の山上のウグラの中程にサークラを造り、その下に鎧兜の武装を甲斐甲斐しくはかせて置いたとのこと。それを案の定攻めてきたところの沖繩の兵隊は、「ああ、やつぱりアジンチェーは元気で生きて居る。健在である。アリヤー ニヤマ ドウクサドウアイ 元氣である」と言い合つた。鼻下よりウジ虫が出ているのを見誤つて、生米を食んでおる、健在である。上陸してもアジンチェーに皆殺しにされる。首里城に帰れば王様から罰せられる。いずれ命はないものと、ならば互いに差し違えて死んだ方がよいというて差し違えて死する者あり、海に飛び込みて死するありで、全滅したとのことである。つまり、「生

きて千人、死んで千人」を滅ぼしたとのことである。

次にまた、首里王は新たに千人の兵を派遣したとのことである。第三回目の寄せてに対しては、ミジュルキのヌル神さまがただ一人、その時は止むなく屋敷の側のしんだばいだい（積墓）のキヤララの神の墓地であるところに甲斐甲斐しく武装して立ち、構えて居ったところを何名かはそのまま通り過ぎて行ったが、後からきた部隊と大奮戦し、一部切り殺したけれども、力及ばず、そのハタサー（頭）が落ちるとき、呪文を唱え、「ニリヤバ イシリ ハネーラバイシリ」と唱えたとのこと。それで敵兵たち、残り隈無く調べ異状がないため、ついに引き上げていった。

その途中に大風にあい、ミジュルキがなしの神様の呪文のごとく、ニリヤ、ハネーラ（ニリヤも竜宮、ハネーラも竜宮）に差し込まれてしまったとのことである。それでアジンチエー様が「生きて千人、死んで千人」、「ミジュルキの神様が千人」はそのためである。全く行く者が帰らず、不思議な島であるというて、王はしばらく「奇怪島」ともいつていたそうである。そのために沖繩からは長くこの与論をうかがうことがなかったとのことである。

ちなみに、ニツチエー神社にはご三体をお祭りしてあるが、一体は、キヤラドウキの神様。これはアジンチエーさまの先祖です。この神様は穩健にして、農業、牧畜の守護神と

して非常に崇敬されている。一体は、アジンチェーの神主・外敵を払い、悪魔風紀を払い争いごと、勝負事をお守りする。また、高い神官の神様として崇敬され、その靈験あらたかなること大である。一体はミズトキあるいはミジュルキとも言う、ヲウナイ神様のこと。その神は、神事の神、また海上安全の神、最強の神として崇拜しておるが、下界に対してもそのご靈験のあらたかなこと、それは各氏子の皆様が体験されてよく判っておることでしよう。

昭和三十八年四月三日（旧暦三月十日）
アジニツチェー神社神主 市来 加平

辺後地築城伝

沖 家寿

ハキビナの沖に光る物が浮かび、岸まで曳いてくると、舟の中に武士八人の遺体が横たわっていた。中でも大将らしき人物が口に巻物をくわえ、光はその巻物から発していた。霊媒（ヤブ）の口寄せにより「私を琉球の見える丘に埋葬し、家来を私の近くに吊ってほしい。そうすれば、この島の繁栄を末代まで見守って上げよう」と告げられたので、辺後地の丘とその崖下に手厚く葬り、巻物を開けてみると《嶋中安穩》《五穀豊穰》《無病息災》と書かれていた。

これは与論に伝わる「ピッチャイプドウン」と題する逸話で、何となく現実離れた物語だが、この武将達の遺骨は実際に存在する。

中山が琉球全土を統一し、尚王朝が隆盛を極めたことの史跡や資料は数多く残されている。しかし、その裏で敗北し滅び去った側の史料は少ない。「ピッチャイプドウン」には我が子の出生について真実を明かせない悲しい母の思いが籠もっている。

時は、日本では室町幕府の足利義満が金閣寺を建立し、中国では明が栄え倭寇が横行した頃、琉球三山のうち北山王怕尼芝は、中山・南山のある本島南部を避け、北に領土を延

ばしていった。伊是名・伊平屋は今帰仁城にいながら手の届く位置にあったが、与論・沖永良部を支配するには出城を築く必要があった。今帰仁本城に長男を残し、沖永良部に次男、与論に三男を派遣することにした。このとき、次男は既に成人していたが、三男王舅（オーシャン）は数え八歳で、与論を支配するには幼かった。

先ず、常套手段として事前に遠征先の状況を探るわけだが、わざわざ偵察を送る必要はなかった。何故なら、家来の中に与論出身者の者がいたからである。呼び出して聞いただけしてみると、与論はまだどこからも支配を受けておらず、島内にも既存の統治者はいないとのことだった。そこで、その者を先発隊として与論に帰し、地頭（じどう）のかしら（として島民の心を掌握し、本隊を迎え入れる準備を命じた。名がないので出身地の「根津栄」に地頭の称号である「按司」を冠し、按司根津栄（アジニツチエー）と名乗らせた数年前、立身出世を夢見て小さな孤島から北山軍の兵として志願してきた若者は、見事郷里に錦を飾ったのである。

また、幼い若君を補佐する側近には、王家の親類縁者、武芸や特殊技能に秀でた優秀な家臣等を揃え、万全な体勢を敷いた。例えば、日本の戦国時代、尾張の織田氏と駿河の今川氏に挟まれ、交互に人質に捕らえられていた松平竹千代君「徳川家康」を守り育て上げた三河武士団と似ている。さて、この時のメンバーに武勇の達人白髪纏（サーギマートウ

イ)や大道那太(ウブドーナタ)、神祇官白馬華與蕃(スーマハナヨバン)等全員で七人の者達が従った。これも中国の史書「三国誌」から引用すると、王舅が劉備玄德、白髮纏が張飛、大道那太が関羽、白馬華與蕃が諸葛孔明に例えられよう。

按司根津栄が島民を掌握したお陰で、本隊到着に際しても何ら争う事無く平穩のうちに与論は北山の支配下となった。築城の場所を島中調査した上で、島のほぼ中央全体を見渡せ、今帰仁本城のある山原(ヤンバル)を望む辺後地の丘が選ばれた。しかし、ここには辺後地拝所(ピグチⅡ陽口Ⅱウガン)があった。

拝所とは、天地創造の神に祈りを捧げる聖地で、先住民の上陸地には水神(アマミキヨ)を祀る赤崎拝所があり、陽口拝所は天ノ神Ⅱ火神(ニライカナイ)を祀る最も尊い聖地とされていた。天ノ神が畏怖と崇敬の対象なのは人の世を制する覇者であっても例外ではない。神祇官すなわち軍参謀である華與蕃は、陽口拝所の管理者半田前宜志(ハンタメーギシ)とその娘白馬巫女加那(スーマミトウガネ)等と話し合い、拝所そのものには絶対手を触れないことを条件として、周囲に築城することを合議した。

支配者と地元司祭者の関係はどうかといえば、当然、民衆が信奉するのは巫女加那のお告げである。作戦参謀で頭のきれる華與蕃は、力で押さえ込むことはせず、巫女加那が祈りを捧げて得た「抽象のお告げ」を自分たちに都合のよい解釈に翻訳し「具体的命令」と

して利用したのである。また、巫女加那の妹と契りを結び、義理の姉弟として強いつながりを持ち、地元民の信用を得ていく。白馬華與蕃の白馬（スーマ）とは、夫人である巫女加那の妹が住む地名である。

今帰仁から渡ってきた彼らは、辺後地から望む山原を龍が伏せた形と見、北山への従属の意味からも城壁を伏龍形の石垣とした。石の掘り出し、運搬、積み上げ、整地、全て人力である。北山軍にすれば人手はいくらでも必要である。一方島民にすれば、今まで誰も束縛を受ける事無く、日々のんびりと原始的な暮らしを送っていたにもかかわらず、ある日突然、島外から制圧にきた少人数の集団にこき使われはじめたのである。進んで労働する訳もなく、原野に逃げ隠れする者、またそのうち、早魃が来たり、疫病が流行すると聖域に戦さ場を造るからだと不平不満をいうもの、遅々としてなかなか工事がはかどらない命令に従わない人夫達の見せしめにと「地ノ神」を鎮めるための生け贄として、生娘を人柱にしたこともあったという。

歳月は流れ、幼君も逞しい青年武将に成長していたが、城は未だ完成に至っていない。そんなとき、今帰仁城が中山軍に攻撃を受け、落城したとの知らせが入った。直に与論・沖永良部にも軍勢が押し寄せてくるのは必死である。早速、作戦会議を開き協議したが、逃げてでも再起を図る兵隊のあてもない。王舅は、潔く迎え討ち、華々しく散ることを主張

するが、側近達は自害を勧める。

日本の戦は、味方同志で手柄を競い、各砦の前に敵将の首を曝すものであったが、琉球では、名のある武将は肉体の一部分でも残っていれば、また再生してくると信じられており、敵将を仕留めたときは自分の陣まで遺体を運び帰り、その夜の祝勝会で交替しながら剣舞を舞い、細かく切り刻んでいくというものであった。だから、王舅の遺体を残しておけば、例え今、北山家が滅んでも、何十年か何百年か後には王舅が復活し「お家再興」の道が残るのである。

次に敵の目から守る方法だが、隠すにしても島が小さく直ぐに見つかってしまふ。判つても手の届かないところ、例えば、海底なら手は届かないが生き返ったときに溺れてしまふ。検討を重ね、陽口拝所に埋葬することにした。犯すことのできない聖地で、築城の際にも絶対手を触れなかった場所に、最も不浄とされる死骸を埋めるといふ大変罰当たりなことをする。だが、もし崇りがあるうとも北山家は滅び、罰を受けるものがない。それに対し、中山はこれから繁栄しようとする一族である。崇りを恐れ、陽口拝所に手を触れることはできないだろうと計算した末の賭けである。

王舅は自害し、側近だけで陽口拝所に密葬した。次の日、ピヤーンヌパンタに立派な墓を造り、島民の中から体の大きな若者を選び出して王舅の鎧を着け、盛大な葬儀を執り行な

う。全ての用事を終えた側近達は、陽口拝所の崖下屍宮（シミヤール）に降りて行き、生まれ変わってもまた王舅に仕え、北山再興に力を尽くすことを互いに誓って自害する。

とうとう残党狩りの中山軍が攻めてきた。北山王から按司の称号を賜った根津栄は、北山に忠誠を誓う僅かの島民と最後の抵抗に挑むが、多勢に無勢で全く相手にならない。根津栄はピヤールヌパンタを攻め登る中山軍を馬上から次々に切り倒し、赤砂（アガサ）の浜まで来ると敵の流れ矢に当たり命を落とすが、仁王立ちになり、敵が寄り付かなかったという。出陣前、飯盛りの差し出すご飯茶碗に箸が突き立ててあり、これが根津栄の絶命する不吉な前兆であったと伝えられる。

上陸した中山軍はピヤールヌパンタの王舅墓を掘り起こして偽物の亡骸を取り出す。討伐軍の総大将を勤める護佐丸もそう易々と騙される武将ではない。まもなく陽口拝所に本物が隠されていることを嗅ぎ付けたらしいが、結局、本物には手を付けず偽物だけを破壊した。王舅軍の思惑通り崇りを恐れたのか、それとも死者の意図に敬意を表した「武士の情け」だったのかは今では知る由もない。

残党狩りの対象は本人のみではない。王舅または一族の落胤を残せば将来反乱を起こす火種になる。ところが、一夫一婦制で同居する風習は後世の事で、当時女性は生家で暮らし「通い婚」が一般的で、子供の父親は誰か解りにくい。中山軍は落胤を探し出すことな

く引き上げる。

中山軍が引き上げた後も落胤の母親は敵の影に脅え、我が子が父親に手を合わせ供養し続ける理由として「ピチャイブドウン」の話を伝えたのである。

その後、尚王朝は按司を駐在させ、約百年後の花城真三郎の代に城は完成し、しばらく按司の居城として使用されたが、更に百年後の薩摩藩による琉球征伐の時外壁が取り壊されたという。

白馬華與蕃（スーマハナヨバン）第二十七代 沖 家寿

診療所の思い出

田中 裕子

村立診療所として開設以来、医師の派遣が滞りなく長期にわたり、島民の命を守り続けて来た事は、離島ながら大変恵まれた環境にあったと思います。また国民健康保険制度も他の島より進み、みんなが安心して診療を受けることができたと思います。

昭和三十年八月に村立診療所として開設された。初代所長は、郷土出身の西田豊作先生であった。二代目所長として藤林先生が昭和三十二年まで勤められた。

当時の与論島の生活環境は本当に苦しい状態であったが、昭和三十年に建てられた診療所は、本土に比べて立派な鉄筋コンクリート建てで、医療だけは恵まれていたと思います。本土よりの交通は海上のみで、しかも千トン未満の客船で鹿児島より片道四、五日程かかり、特に台風のときは二週間くらいかかり、生活物資、医療薬品は底を突く状態で、一番困ったのは診療所でした。

久留米大学より派遣でこられる先生方は、長期の船旅は初めての方が多く、与論島への派遣は命懸けの道中で「戦争に行く気持ちできている」と言っておられました。先任の先

生方よりいろいろアドバイスがあり、「予備知識は十分勉強してきたつもりだが想像以上だ」とも言われていた。ようやく着いた船はリーフの沖留まりで、本船よりはしげに乗り移る時も命懸けであり、一步誤れば海に落ちるのである。いつも真夜中に着く客船は電灯のない暗い島影が遙か彼方に微かに見えるだけである。益々不安になる。港らしい所で懐中電灯の明かりだけが点滅しているのが見えるだけである。船が茶花の港の時は、時間まで仮眠ができるので嬉しかった。

診療所の職員は、男子事務員四名で看護婦は正看護婦二名と補助看護婦四名の勤務である。入院ベッド数は十九床、外来患者の受付は二十四時間制限なし、レントゲン技師不在。薬剤師も不在で、掃除まで全て看護婦がやらなければならなかった。

茶花が本所で、与論校区に朝戸僻地診療所、那開校区に那間僻地診療所があり、本所は毎日診察が行われ、二ヶ所の分所は隔日の出張診療で、午後の診察であった。

沖繩が返還されるまでは、与論島が日本の最南端で検疫所の出張所が置かれていた。医師が常駐しておられ、検疫のない日は午後より往診と分所の診察を手伝って下さった。

医療器具は、手術機械等ほとんど揃い、外科的手術は困らなかったが、敷布や手術衣は二人分しかなく、天竺を買い自分たちで裁断して、毎日午後から看護婦一人がミシン掛けに取り掛かって作った。厳しい予算の中で診療所の予算は、ある程度通して下さった。

また、電気が南商事の個人経営で夕方五時間ぐらいの送電であったので、手術のある時はお願いで送電していただいていた。水道は現在のような施設でなく、診療所屋敷内の井戸水をモーターで汲み上げて使っていた。燃料は薪と木炭を使用し、手術衣の滅菌には木炭を使用していた。

三代目所長、金鐘勲先生から、久留米大学付属病院脇坂外科より派遣されるようになった。

開設三年目の昭和三十二年七月一日の第一回目の派遣より、昭和五十年四月十日を最後に実に十八年間、六十二代の先生方が長期にわたり、与論島民の生命を守って下さった。

久留米大学付属病院脇坂外科より、医師の派遣が継続的に行われたのは、郷土出身の林健也先生のご尽力とご高配の賜と思います。先生は、久留米大学医学部を卒業され脇坂外科教室に入局され、その後客員医局員として大学に籍を置き、鹿児島市内に外科医院を開業された後も、与論島へ派遣される先生方をその都度お世話くださったことを忘れることはできません。

四代目所長、倉本進賢先生は、久留米大学病院では、麻酔医の先駆者として当時全身麻酔で手術する場合は、その都度よその病院にもご指導に行かれていました。私も田川病院で先生と何度か手術をご一緒させて頂いたことがあり、先生が与論島へ派遣されて来られ

た時は驚きました。

私は臨時で勤めていたが、半年後本採用となった。この頃、約三年間の未請求のカルテが溜まり、診療報酬の請求書を書くために、倉本先生に病名を書いて頂いたり、請求書を見て頂いたり先生が二カ月で交代されるまでご指導を頂きました。倉本先生は、その後久留米に帰られて間もなく、麻酔科の初代教授になられ、私もその年の十月に本採用になり、職員として責任ある仕事に就くことになりました。

五代目所長、柳瀬靖先生が派遣されて来られた時、折角先生が二人お揃いの機会に、手術を行うことになり、患者は頸部リンパ腺摘出とソケイヘルニヤの二例で、私もお手伝いすることになった。久留米大学より来られた先生方による手術は、この日が初めてであった。

六代目所長、龍嘉明先生、昭和三十三年七月から三カ月、先生は雨天の往診中、悪路バイクだけしか通らない小道の高さ二メートルの所より落ちて頭部打撲、左上腕を五針程の怪我をされたが、後遺症もなく全快された。入院患者五十二名、手術二十一名で患者が増えた。

七代目、金鐘勲先生が二度目の派遣で来られた。先生は最初の時は七カ月勤務されて、与論の方言も上手にお使いになり、島の人々との交友も厚く、広く親しまれておられまし

た。

特に、この頃より外来患者も多くなり、一日百六十名は下らなかつた。それに伴い入院患者と虫垂炎の手術が多くなり、腹痛で疑わしいときはすぐその場で血液検査を行い、白血球数が一万前後の時は、医師より早期に手術を要する旨診断が下され、患者と家族によく説明し、入院の準備をさせる。入院準備は、寝具、炊事道具に薪まで運ばねばならないので大変であつた。看護婦も準備には時間がかかり大変であつた。手術衣の滅菌器シンメルブツシュー器は、大のガ―ゼ缶が二個しか入らないので余裕がなく、燃料の木炭の火は火力が下がらないように、常に注意しながら二時間掛けて滅菌する。機械の滅菌も同じく木炭を使用し、手洗いの水は窯で炊き、三十二センチ大の釜でお湯を沸かし、ついでに洗面器や杓も消毒する。

手術時間は当日の先生の午後の予定により決定する。往診の日は、手術を先に済ませてから往診に行く。また、分所の日は、状況により診療を済ませて、五時頃から始める事も多く、看護婦は二人で、執刀のアシスタントは、久留泰がつき手術を始める。器械取りは他の看護婦が交代で介助し、枕元は山下ウメと田中裕子の二人がつく。麻酔は腰椎麻酔で執刀されるので、血圧測定、脈拍、呼吸の状態など全身の異常に、些細なミスも許されない緊張の連続である。三十分以内の時間なれど無事に終了したときの安堵感と嬉しさは患

者共々何とも言えない喜びである。

先生は術後の経過を診て注射や処置の指示を出して往診や分所へと出掛けられ、一人で休む暇もなく忙しい毎日であった。

看護婦も先生と同様で忙しく、本所には山下と田中が術後処置や、外来患者の処置、急患で腹痛や、骨折の疑いのある時はレントゲン写真を写し、また、血液検査をして先生が帰られてすぐ診断ができるように介助する。また手術衣やガーゼの洗濯、器械器具の清拭油拭き等、ちゃんとその日のうちに整理しなければならぬが、時間内にはなかなか終わらない。また材料作りも毎日追われる始末で、一つ一つがみんな手作りであるので手間のかかる仕事で、いつも二十時ないし二十一時頃まで仕事して帰宅する毎日であったが、それでも超勤手当はもらえず、現在ではまったく考えられない苛酷な勤務で、働き蜂のように諦めて黙々と働いた。

事務員は当直がないので十七時以降は、当直の看護婦二人が時間外の患者の受付、介助処置、投薬、会計までやる。また当時は掃除婦も不在だったので、雑巾掛けまでした。また、薬剤師も不在のため、山下ウメは薬品や包帯材料の注文及び受け払いの整理等、田中が、診療の間に器械器具の注文及び備品台帳の整備、カルテの整理等をした。久留泰、町文子、山喜和子、松達子が毎日午後から外勤で分所と往診に出掛け、本所に時間内に戻

れないので、包帯材料の整理や手術用の滅菌消毒は時間外の仕事になった。

なお、レントゲン技師も不在で撮影も看護婦がしなければならなかった。検査技師が不在のため顕微鏡検査は田中裕子と山下ウメがやり、他の簡単な検査は久留泰、町文子、山喜和子、松達子が行った。また月末と月初めには保険の請求業務があるので、入院患者の保険請求書は田中裕子を書き、外来患者分は山下ウメと事務の嶺島亘の二人が担当して行った。このような看護業務以外の仕事がこの時代は非常に多かった。

新年度になると、島内の各学校の健康診断が始まり、役場の厚生課の担当者と日程の打ち合わせを行い、先生の日程を調整し、一カ月の短期間で実施した。学校の教諭の家庭訪問の際、保護者との面談に健康診断の結果が必要とされ、日程の調整に大変苦労した。

一週隔日毎の往診日を検診に当て、午後二時より二時間間に二学年四学級約二百名程を予定し、学校の教諭にあらかじめ生徒の健康状態をチェックしてもらい、診断の資料とし、先生の健康診断では聴診しながら全身状態と皮膚・耳鼻科・トラコーマの検査を行い看護婦として田中裕子が介助を行ったが、突然救急患者のために予定どおりの日程ではできなかった。健康診断が済めば検便の検査をしなければならない。学校の教諭方の協力を得て、二学年四学級約二百名程の名簿と塗抹した便を揃えてもらい、仕事の合間に検査する。当時は蛔虫よりも鉤虫卵が最も多く、糞腺虫症が次に多かった。鉤虫卵の疑わしい生

徒は前もつて集卵法で検査した。与論では特に鉤虫卵が多く、海人草を煎じて飲まされたものである。学校生徒の健康診断が済むとほつとした。また、この時期に派遣される先生は大変であった。

先生の派遣は空白もなく順調に行われ、年に四名ないし五名が来島し、当初は役場主催で歓送迎会を行っていたが、次第に診療所だけの歓送迎会となっていた。

新しい先生が赴任されると必ず患者が多くなり、外来・入院とも増え、それに伴い手術も多く益々忙しくなる。先生在任中は、入院患者は五十名内外で患者の中では法定伝染病の赤痢が多く、また破傷風も多かった。手術は二十名ないし三十名平均で執刀された。主に虫垂切除術が多かった。中には産科の帝王切開（分娩子癩）もあり、看護婦のアシスタントで執刀された。

一番思い出になるのは、七代目金鐘勲所長が赴任されて間もなく、急用で久留米の方へ帰られて一週間位の先生不在の時、思わぬ急患があり、二・三日前より腹痛があるのをおして働き、勤務中に失神して倒れ、戸板で担ぎ込まれた。検疫所の泉先生にお願ひして診てもらった。腹部全般膨満し、圧痛はなほだしく激痛に苦しむ。血圧は下降し発熱三十八度に上昇、白血球数二万以上に達する。虫垂炎による穿孔性腹膜炎診断で、一刻も早く手術を要す状態で一命に係わる症状であった。先生の来島を待つにしても一週開かかるし、

隣の沖永良部島へ行くか、先生を招聘して手術して頂くのも時間がないので、泉先生に私がアシスタントとして手術をしてもらった。

腹腔は膿が充満していて悪臭あり、手の付けようもなく吸引排膿してタンポン挿入し、手術を終える。術後は急変もなく疼痛も軽減し熱も徐々に下がり、一週間ぐらいで放屁もあつて、ようやく症状も安定してきた。金鐘勲所長も一週間位経って帰ってみえたが再手術する事もなく順調なため、そのまま経過を診ることになった。患者は一命を取り留め長い入院療養で元気に退院することができた。

八代目吉村文雄所長、昭和三十四年二月より三カ月勤務、入院患者二十七名、手術十八名で主に虫垂炎の手術であった。全員経過がよく元気に退院した。

先生はバイクに乗られるのは初めてで、往診の時看護婦を乗せたまま水田へ落ち、二人とも全身濡れ鼠のようにして、途中で一度帰って来られた。幸い怪我もなく、「落ち方が上手ですね」と半分慰め驚いたものでした。

九代目田山基光所長、昭和三十四年五月より五カ月勤務、入院患者八十七名、手術七十九名で夏休み期間中で、学童の虫垂炎が多かった。先生は腕裁きが良く手術も多かった。

十代日永田勇所長、昭和三十四年九月より三カ月勤務。入院患者四十五名（破傷風一名）、手術三十一名（帝王切開一名）で、毎日の勤務が苛酷で午後五時が退庁時間であつ

たが看護婦は、午後九時ごろまで帰宅することはほとんどなかったもので、先生は私も勤務状態に同情し慰めて下さった。何の娯楽もない環境にせめてダンスでも教えてあげようと、宿舎で教えて下さり、楽しい思い出となった。

十一代目山田勝義所長、昭和三十四年十二月より四カ月勤務、入院患者五十三名、手術三十五名で、この時期はインフルエンザの大流行があり、往診が増え、一日二十名程で夜の十一時頃迄で疲労も極度に達し、幸い奥さん同伴で赴任されていたので、夜遅くでも温かい食事を召し上がる事ができて、私どもも安心することができた。また先生は私が福岡県の田川病院在職中に、一カ年インターン生で来られたので、一緒に出勤したことがあった。まさか与論島の診療所と一緒にするとは思ってもよらなかったことで、先生は私と与論島の出身であることに驚かれた。思い出も歴史として残っている。

十二代目大宮泰正所長、昭和三十五年の夏、恩師久留米大学付属病院第一外科脇坂順一教授を招聘し、山内伴先生が同伴下さり、二日間で十名の手術患者を執刀されるお話を伺った時は、果たして現在の看護婦のメンバーでできるか心配と不安が一杯であった。電気・水道・ガスの設備もないこの環境でどうやって乗り切るかという事であったが、診療所職員総動員で昼夜兼行の準備が始まり、当時としては、島外へ出掛けて手術を受けるにしても、交通の便や経済的にも大変な時代であり、対症療法で治療を続けていた。手術さえ

すれば完全に治る患者は多いと診断された先生の強い決断により、手術を行うこととなった。

先生の強い意思により私どもの不安は解消され、全職員一丸となって取り組んだ。まず看護婦の仕事を分担して取り掛かることになった。当時レントゲンは四十ミリの手持ちで先生は苦勞されながら透視をされていた。午前中は診療に、午後は僅かな時間をさいて検査をした。現在の臨床検査センターに出すような精密な検査は不可能であるが、できるだけ検査を行った。

まず手術患者のチェックで次の患者が選ばれた。

第一日目 胃潰瘍二名、十二指腸潰瘍一名、陰嚢水腫一名

第二日目 胃潰瘍一名、子宮筋腫一名、卵巣嚢腫一名、陰嚢水腫一名、ソケイヘルニヤ一名

検査項目については

- (1) 胸腹部 X線撮影透視。(医師または看護婦)
- (2) 検血・赤血球・白血球・ Hb ・血清蛋白・血液型・出血時間・凝固時間。
- (3) 検便・潜血反応・虫卵・鉤虫卵・糞腺虫。
- (4) 検尿・潜血反応・蛋白・糖・ウロビリノーゲン。

(5) 身長・体重・血圧測定。

(6) 輸血の確保

(輸血は直接輸血のため、一人の手術患者に十人程度の同型の供給者が必要で、検査はクロスマツチをして、当日該当事者に待機してもらった。救急の場合は、一人百ccずつ採血し直接輸血で行う。)

手術準備として、当時は既製品がないため全材料一人一人手作りで作成した。縫合糸は手術創により号数が違うので、陶器の糸巻きにケン糸を無水アルコールで脱脂して、牽引しながら巻き、これを三ないし五%の石炭酸水液の消毒液で煮沸滅菌し、無水アルコールに漬けて保存して置き、その都度使用する。久留が責任を持って作った。綿球、ガーゼ折り、手術衣、敷布の滅菌等は、久留泰、町文子、山喜和子、松達子の四名が責任を持って作った。薬品・包帯材料の注文整備は、山下ウメが担当した。

久留米大学医学部第一外科脇坂順一教授を迎えるために、役場では歓迎の横断幕を作り村長、助役をはじめ主だった方々や、診療所職員一同でお迎えする。午前三時電気もない暗い港で脇坂順一教授のお顔を懐中電灯で写してご挨拶を行い、便利屋旅館にお泊り頂いた。山内伴医局長が随行して来られた。便利屋旅館は、砂浜を庭にしたような静かな場所にあり、教授先生はお気に入りだった。

山内伴先生は、ひとまず手術の打ち合せのために診療所へご案内し、手術患者についていろいろ指示され、明朝九時の執刀ということになった。看護婦一同は当直室で仮眠し、手術の準備に備えた。

手術の当日は、外来は休診で午前六時に起床し、職員総動員して手術の準備に全力であつた。初めに久留が手洗いをし、大宮泰正先生が続き、患者の入室も終わり、山内伴先生による腰椎麻酔も済み、手術できる態勢を整えて教授の執刀を待つ。

胃潰瘍の手術は執刀より四十分程しか掛からないので、間歇の時間を取らないよう患者の移動が大変である。粗相のないように再三の確認は慎重であらねばならない。次の患者を確認し、術前の麻酔は必ず二・三人の看護婦が再確認して手術室へ入れる。普段の手術は、医師と看護婦が行い、枕元の看視は看護婦の由中裕子、山下ウメの二人でいつもあつていたが、今回は山内伴先生の下で指示を仰ぎながら介助を行った。楽である。少ない看護婦で術後の処置も指示通り行い、第一日目の患者四名、午後五時頃までに無事終えた。一日目の手術終了後、午後七時より両先生の歓迎会が茶花公会堂で行われた。役場職員、村議会議員、村の有志の方々約百名で盛大に歓迎会を行った。ご馳走は海の幸で、魚、貝、伊勢海老の新鮮な珍味がいっぱい先生方の前に盛られ、教授先生は、お酒は好まず料理に大変感激の様子であつた。旅の疲れも見せず、私どもも大変嬉しかった。翌日も数名の手

術が控えていたので、宴会は早めに切り上げてお休み頂いた。

二日目も午前九時の執刀である。山内伴先生は朝七時頃来院されて、ご指示を出され、準備に掛かった。外来は休診だったが、患者数名は手術後脇坂教授先生の診察を受けるため待たせた。前述の如く準備を完了し、まず胃潰瘍の手術から始め、婦人科の二例も順調に手術は終わった。術後に予定した外来患者数名を診てもらい、そのうちの一人が脳腫瘍の疑いで、久留米大病院に転医する事になった。その日の夕食は、先生方三人で水入らずの夕食会をなさった後、脇坂教授はお疲れの様子もなく、アフリカから持ち帰ったスライドを茶花小学校の校庭で、多くの村民に上映して見せて下さった。電気のない時代だったので個人経営の南商事にお願いで、特別に送電して頂いた。

脇坂教授は敬虔なクリスチャンでした。アフリカの未開地に病院を建て、貧しい難民のため施療されたシュパイツァー博士の手伝いをしながら若い頃活動した様子の記録スライドを上映して下さり、初めて進んだ文化の一端を見た思いでした。

三日目の午前中は、島内一周でした。脇坂教授は途中与論中学校に立ち寄られ、中学生の裸足が多いのに気付かれ、久留米に帰られた後に、運動靴を学校にご寄贈下さった。午後は運送店の舢を借りて、村長、助役、議会議員、診療所職員と一緒に魚釣りを楽しまれた。職員は海に潜り、魚を捕り当日は大漁だった。舢の中で取り立ての魚を料理して大勢

で食べ、賑やかな宴であった。教授先生は、内地では味わえない事だと喜んでおられた。午後六時頃、便利屋旅館へ帰られ、その夜の真夜中の午前三時の船で帰途につかれた。

船の発着はいつも真夜中で、送る人も送られる人も本当に大変であった。先生方を見送った夜は幸い、茶花の港でしたので、脇坂先生は時間までお休み頂いて、舢舨が出る頃乗って頂いた。暗い港で、万歳の声高らかにお見送りしたものでした。

先生方をお見送りした後、手術患者の管理が大変である。当直者を一人増やして当分の間、三人で隔日毎に泊まることにした。大宮先生もまた一人で益々忙しくなり、昼夜お休みになる時間さえない状態である。夜間、時間外の患者のときは、看護婦が処置できるものは看護婦が処置して帰し、五分でも十分でも休ませてあげたいと先生方の健康にも気を遣ったものでした。若さと気力で挫けることもなく、本当によく頑張つて下さった。

脇坂教授に執刀頂いた患者は、頓調に回復し、全員元気に退院していった。当時の厳しい環境の中で、よくも大勢の手術を施行されたことは、冒険の一言に尽きるのである。全員が一丸となってチームワークのもと、看護婦のミスもなく大仕事を成し遂げたことは、何よりの経験でした。

大学病院では近寄りがない雲の上の教授先生が、こんな離島へ御自らわざわざご来島し手術して下さる事など、めったにありえない事である。医局員を派遣して下さることだ

けでも有り難い事であるのに、今回のような事までして頂き、好結果を得た患者にとつても、また職員にとつても大きな収穫でした。医学の第一線をいく大学の医術と技術をもつてご指導下さるので、私たちも毎日が勉強でした。与論の人々は、他の町村に比べて恵まれた医療を受けることができたと思う。現場で働いている私達はいつも身に染みて感じていた。大宮先生は、大きな仕事を終えられ、いよいよ交代されることになった。手術をして頂いた患者さん方は、感謝をこめてお別れを惜しんだ。三カ月でした。

十三代目中村康弘所長・先生が代わられる度に外来、入院が増え、したがって手術も増えてくるので、環境に慣れないうちに忙しくなる。約五カ月の間に入院九十一名、そのうち赤痢六名、破傷風二名、手術患者は四十七名でした。赤痢も破傷風も度々発生していた。ジフテリア血清と破傷風血清は役場厚生課が、責任をもって確保し、患者が発生する度に払い出していた。たまたま破傷風用血清の在庫が少なく、患者は二名とも重症で一刻の猶予も許されない。絶対必要な薬品なので行政は、鹿児島県へ、ヘリコプターによる血清を要請したので、その日の午後、東海岸に日の丸の国旗を目印にして落してもらい、破傷風患者の一命を取り留める事が出来た。

十四代目笹富公夫所長、昭和三十五年十二月より四カ月間勤務。入院患者三十六名、手術三十六名で、流行性脳脊髄膜炎一名発生した。昭和三十六年一月診療所の敷地内に法定

伝染病棟が新設され、早速収容された。また全身大火傷（第三度）の重症患者が入り、治療の甲斐があり、全快して退院していった。先生は戦争中軍医で、中国大陸で活躍された方でしたので、私も戦地の陸軍病院勤務の経験があるのでいろいろお話したものでした。松達子さんは結婚のため辞められ、看護婦の金井やすえが勤める事になった。

十五代目加藤田昭男所長、昭和三十六年三月から四ヵ月勤務。入院患者六十八名、そのうち手術二十九名、破傷風一。日本脳炎が九名あった。その年の六月末頃より爆発的に発生した。突然高熱とともに痙攣を起こし、顔面はチアノーゼを呈し、意識は朦朧として呼び掛けにも反応なし。往診依頼の電話が引っぱりなしに掛かる。運ばれてくる患者は即入院で、同じ症状で重症である。両腕は常に額面上で何かを捕まえるような動作をする。脊髄液圧は二百ミリ／hgを超え、髄液は混濁し、殆ど血液である。ただちに日本脳炎として徳之島保健所へ届けを出した。法定伝染病の中で最も恐れられていた日本脳炎が、与論島に発生したのである。

鹿児島県は、与論を日本脳炎指定地区にし、直ちに対策が講じられました。島民全員に予防注射の徹底、蚊の駆除、蚊に刺されないように注意すること、生水を飲まない事等、細かい注意書きで、衛生面に努力された。患者は遂に十一名に増えた。電気水道がないので水が出来ない。水では生ぬるいが仕方がなく、芭蕉の茎を砕いて氷枕にして冷やしたり

して、民間療法を併用しながらの看護が続く。熱は稽留し、痙攣も依然として続く。痙攣による呼吸停止が時々起こるので、人工呼吸を施したり、酸素吸入の交換、点滴注射の追加鼻腔栄養の追加等先生と看護婦は、食事する暇さえないほど病室を次から次へと走り回る有様である。

当直明けの日も勤務して、翌日も平常通りの勤務をした。二晩だけ家に帰る連続であったが、それでも誰一人愚痴をこぼす事無く、看護に没頭した。患者十一名の内、二名が発病後、間もなく亡くなりお気の毒でした。患者の症状はみんな依然として重篤である。高熱も三ないし六カ月ぐらい続いたが、熱が下がるとほんの僅かながらも、呼び掛けに応えるように目の動きが出てきた。また口元に何か刺激を与えると食べる仕草をし、何となく意識が回復しつつ感じられたので毎日刺激を与えた。特に足のマッサージをしたりした。若い人ほど回復が早かった。

後遺症もなく正常人と同様に回復、悪夢から覚めたようであったが、五歳の女の子一人だけが障害が残り、現在も家族の温かい看護を受けている。日本脳炎の患者を看護して、これほど怖い伝染病はないと思った。それ以来、毎年日本脳炎の予防注射だけは老若男女一人残らず受けるようになった。自分だけでなく他人に迷惑が掛かることを知らされた。

加藤田先生は、小さな体で弱音をほくこともなく、外来診療、分所、往診、十四・五名

の重症患者すべてを診て頑張つて下さった。若さと健康、忍耐力、精神力があつたからと思ひます。爆発的に発生した日本脳炎も、十四・五名で食い止めることができ、また幸い現場の職員一同には、一人の感染者もなく、医師を中心に全員よく頑張つたと思う。先生は四カ月間で随分細身になつてお帰りになつた。本당にご苦勞様でした。

十六代目山川良精所長、昭和三十六年七月より四カ月。入院患者五十九名、手術三十九名、赤痢七名。日本脳炎二名の繰越があり、その内一人は亡くなつた。また伝染病棟が新設され、入院患者が絶えることがなかつた。

十七代目宮島勇所長、昭和三十六年十一月より四カ月。入院患者三十八名、手術二十三名、破傷風一名。日本脳炎四名（繰越患者）はいずれも軽症であつた。また先生は耳鼻科も専攻されており、外来で五十二名の扁桃腺摘出手術を施行された。この頃学童に風邪が流行して高熱を出し、欠席する生徒が多かつたが、扁桃腺の手術によつて欠席者も少なくなり、皆さんに大変喜ばれました。

なお、この年に往診用の車が購入され、バイクから車になつたが、後部扉は壊れ、廃車寸前同様な車で、荷台の両脇に三人ずつ座れる座席があつた。当時は現在のように舗装道路ではなく、道幅も狭く、雨が降るとぬかるみにはまり、皆でぬかるみから出すのが大変でした。また車の動きで天井に頭をぶつけることもしばしばで、それでも車に乗れるだけ

で嬉しかった。両分所に歩かなくてもよく、往診時雨に濡れることもなく、一步前進した感じでした。私どもは、「宮島車」といって今でもポロ車を思い出す。

暮れの役場職員の忘年会の時、先生自ら振り付けして「草津湯」の演芸で二位になった。また看護婦の町文子が、結婚のためブラジル在住のご主人の元へ行かれることになり旦那不在の結婚式が行われたとき、先生が仮の旦那様役になり、大いに宴を盛り上げられました。先生は、四カ月の短い間にいろんな思い出を残された。

十八代目村上直秀所長、昭和三十七年三月より六カ月。入院患者百二十三名、手術七十七名、赤痢二十四名、日本脳炎四名（繰越患者）。

この年、脇坂順一教授の二回目のご来島を仰ぎ、今回は一日だけの手術である。手術患者は、十二指腸潰瘍が三名、右ソケイヘルニア一名、虫垂炎一名。

検査項目は

- (1) 胸腹部×線撮影透視（医師または看護婦）
- (2) 検血、赤血球・白血球・Hb・血清蛋白・血液型・出血時間・凝固時間
- (3) 検便・潜血反応・虫卵・鉤虫卵・糞腺虫
- (4) 検尿・潜血反応・蛋白・糖・ウロビリノーゲン
- (5) 身長・体重・血圧測定

(6) 輸血の確保

今回の手術は、前回体験し勉強したので、準備を含め順調にいき、手術後は全員順調に経過して、元気に退院していった。

村上直秀先生は村民の人望も厚く、派遣の期間を延期してもらいたいとの要望により、行政当局が秘かに脇坂外科医局長へ相談されたところ、医局長は本人の意思の問題で、本人がOKならOKとの返事で、村上先生にお願いしたら、六カ月間頑張つて下さるとのことでした。村民は有り難い気持ちで一杯でした。先生は六カ月間、笑顔を絶やさず優しい気持ちで診療して下さった。

この年には、与論に南陸運(株)(南前村氏)の運営で、バスが通るようになった。初日には無料で患者さんも乗せて頂いた。お陰で私どももバス通勤が出来るようになった。また町文子がブラジル花嫁として旅立たれ、鹿児島では村上直秀先生のお見送りを受けたようでした。看護婦の山下信子、港テツが新たに勤められました。

先生が久留米へ帰られるときは、現在駐車場になっている役場下の砂浜で、お世話になった方々が集まり、円陣を組み松明の明かりで、酒を酌み交わし、船を待ちながら名残を惜しみました。あれから二十年がたった平成四年に、先生が来島され、発展した与論に、当時の面影はなく、また一緒に勤めていた職員も四・五名と、昔を知る人も少なく、淋し

くなつたと述懐されていた。

中央公民館の二階へ上る階段の壁には、当時の与論を写した写真が飾られていて、写真を見るたびに歴史の流れを感じさせられます。

十九代目向井治吉所長、昭和三十七年九月より三ヵ月。入院患者四十六名、手術十五名、破傷風一名、赤痢十三名、猩紅熱一名。先生が久留米にお帰りの時、高校生三名を見習い看護婦としてお世話下さり、現在も立派に看護婦として活躍中である。この年猩紅熱が蔓延する。

二十代目福田俊一所長、昭和三十七年十二月より三ヵ月。入院患者百二十五名、手術七名、紫班病二名、猩紅熱百八名、特に猩紅熱が爆発的に発生し各校区に広がる。主に学童で、大人も十名程発病した。発熱は三十七度五分が最高で、二・三日で解熱し、全身に米糠状の紅い発疹が現れ、融合し痒みがあり、一週間程で回復に向かう。この頃、皮膚が落屑し飛沫による接触伝染で、数日間で百名程になり、収容が大変であった。発疹だけの軽症患者であったので、病室の各ベッドを出し、床の上に畳を敷き収容した。発生と同時に隔離して治療されたので、発生患者に合併症を併発することもなく、予後も良好で次々と退院させた。一時は学校も休校したが、一週間程で無事に切り抜けることができた。

なお、福田先生は常に爪切りを持参して外来患者や入院患者の爪を切って廻られ、時に

は往診患者の爪も切って下さり、本当にお優しい先生でした。

二十一代目米田礼之所長、昭和三十八年二月より四カ月。入院患者九十一名、手術二十八名、猩紅熱四十三名、血友病二名。血友病は出血が持続するため、新鮮血の輸血にて止血した。猩紅熱は繰越の患者で全て軽症であった。

二十二代目田尻進所長、昭和三十八年六月より四カ月。入院患者五十五名、手術三十名。日本脳炎一名は、繰越の患者で経過は良好でした。

二十三代目城戸一雄所長。昭和三十八年十月より四カ月。入院患者二十七名、手術十七名、赤痢二名、血友病一名。血友病一名は同一患者で、出血が始まるとすぐ二百CCの新鮮血液直接輸血にて止血した。また看護婦の竹貴美子、登坂勝子が採用された。

二十四代目近準一所長、昭和三十九年一月より五カ月。入院患者百三十七名、手術百九名、破傷風二名。この年はインフルエンザが大流行し往診が多く、一日二十四名が最高で夜半遅く迄かかった。先生は久留米に帰られ、現在は別府に開業され、与論より三名の看護婦を養成して頂き、看護婦は現在も各所で活躍しておられる。

また、この年に茶花と立長地区に簡易水道が敷設されて、自由に水を使うことが出来て嬉しかった。

二十五代目倉岡三郎所長、昭和三十九年七月に十三日間。入院患者十四名、手術三名、

フィラリア症一名、先生は赴任十三日目に、お父上が脳溢血で倒れられ急遽帰られた。

二十六代目眞栄城兼信所長、昭和三十九年七月より二カ月。入院患者四十一名、手術二十三名、赤痢四名。先生は沖縄県出身で方言は殆ど同じなので、ご赴任当初より島言葉遣われ、特に親しみを感じた。お互い生活環境が似ており、時々、昔の生活状況について語られ、話が尽きる事はなかった。現在はコザ市（現在の沖縄市）で開業され、与論からも患者を度々お願ひしてお世話になった。

二十七代目木戸昌夫信所長、昭和三十九年十月より三カ月。入院患者三十八名、手術二十七名。先生の宿舎に初めてテレビが入り、十月には東京オリンピックがあり、先生とテレビを見て応援した。先生は帰られて長崎県の小浜温泉地に開業されたようでした。

二十八代目出口忠男所長、昭和三十九年十二月より五カ月間。入院患者五十九名、手術四十九名、日本脳炎一名（重症で亡くなられた）。現在先生は久留米市内で開業されておられる。この年麦屋地区（城、朝戸）に簡易水道が敷設され、私達の家でも水道が自由に使うことができるようになった。

二十九代目安部隆治所長、昭和四十年五月より三カ月。入院患者五十四名、手術十六名、赤痢一名、血友病二名、日本脳炎一名。日本脳炎の患者は、入院後間もなく亡くなられたこの年、入院中の糖尿病患者が昏睡状態になり、酸素の在庫が少なく米軍ヘリコプターを

依頼して、沖永良部島から取り寄せた。これが米軍への依頼第一号であった。酸素の在庫不足の時は、いつも南島開発にお願いして譲っていただき、大変ご迷惑をかけましたが、急の時は快く協力して下さって有り難かった。

三十代目桑野健治所長、昭和四十年八月より四カ月。入院患者三十四名、手術十九名。先生はスポーツマンで、与論小学校の運動会では、一般の部五千メートルに出場活躍された。現在先生は福岡で開業され繁盛してお忙しい様子である。この年、電気が島内全域二十四時間送電になり、昼夜明るい電気の下で看護でき、文化的生活ができるようになった。また脇坂順一教授の三回日の来島があった。

三十一代目福光高德所長、昭和四十年十二月より三カ月。入院患者二十七名、手術十八名、日本脳炎一名、伝染病は絶える事無く一年中発生していた。

ある患者は、悪寒戦慄を伴い発熱で激しい頭痛、嘔吐を反復し、高熱は稽留し意識混濁両手は顛面の前で何かをつかむ仕草をする。腰椎センチによる脊髄液は白濁し、脊髄圧液は二百ミリ/hgを超える。呼吸も停止状態になり、自力呼吸不能で直ちに気管支に挿管し、酸素を流す。看護婦は二十四時間体勢で手動のバックを操作する。四、五日で自力呼吸が見られる。抜管して経過を診るに、痰が詰まり、これも絶えず吸引器により吸引を行った。気管に詰まると直ちに気管切開を行い、カニュレを挿入してこれも看護婦が二十四

時間体勢で看護する。また連日三人ずつの当直となり、昼夜の疲れは限界であったが、看護の甲斐あって徐々に回復に向かい、一命を取り留める事ができた。人の命は、神様により救われる運命であると感じさせられました。

大きな人身事故が発生した。午後七時頃男の子が担ぎ込まれてきた。痛い痛いと呼びながらも意識ははっきりしていた。左顔面半分は剥離して土、砂により汚染し出血、顔面の形は、分別のつかないほど損傷を受け、口元だけは残り、お喋りはできた。なお、顔面だけでなく左鎖骨骨折、左大腿骨単純骨折で外傷なし、幸い先生が往診中でなく、直ちに処置ができた。大量の消毒水を作り、顔面の汚染創のブラッシングすること約一時間、皮膚を引き寄せ縫合する。皮膚は剥離しただけで欠損はわずかで、縫合して初めて顔面の形ができた。鎖骨骨折、左大腿骨単純骨折は、固定包帯や牽引し、経過を診ながら手術をされた。患者は恐怖から覚めず、一カ月ぐらいは毎日同じ時間になると、意識は普通にある中で大きな声で叫びながら、恐怖心に襲われる動作が続いた。患者の気持ちが悪く落ち着いた頃、鎖骨骨折の手術をして、その後左大腿骨単純骨折の手術をした。経過がよくなるに従って恐怖心もなくなり、笑顔がでるようになった。手術は全て経過良好で、転医することもなく、診療所で加療できたことは幸いでした。頭部の外傷がないのが不幸中の幸いでした。脳にも異常がなく、顔面の皮膚の移植は幾度か受けたが、その他は後遺症もなくきれ

いに治癒し、現在は実業家として活躍中である。先生の適切な治療と技術には頭の下がる思いでした。福光先生がお帰りの時は時化が続き、茶花や供利の港には船が着けず、前浜の港より見送りしたのは前にも後にもこれが初めてである。先生は久留米に帰られた後、現在大分県の国東半島で大きな病院を経営されておられる。

三十二代目溝手博義所長、昭和四十一年二月より三ヵ月。入院患者十六名、手術十名。分娩後四日目に出血して来院する。福光先生が久留米に帰られる前でしたので、直ちに帝王切開をされた。先生がお二人おられるときでしたので、本当に助かった。出血がひどいので、手術中も大量の新鮮血を輸血しながら行った。患者は失血の為なかなか改善せず、子宮の全摘出後、しばらく血圧の改善を見る。一千ccの輸血で止血し、ようやく回復して元気に退院された。

三月には歯科が開設された。診療所の北側に棟続きで増築され、初代所長に浜田光一郎先生が赴任された。事務員一人と看護婦一人が勤務し、診療所も大世帯になった。

三十三代目大仲良一先生、昭和四十一年五月より三ヵ月。入院患者五十四名、手術四十五名、帝王切開一名。先生が赴任されてまもなくの日曜日の朝、二十歳の青年が交通事故を起こして担ぎ込まれてきた。全身打撲で意識消失、全身極度に浮腫をきたし紫色で事故の凄さを感じた。応急処置を施した後、米軍のヘリコプターを要請して、先生と私が付き

添って沖縄の赤十字病院へ転医したが、残念ながら亡くなり、翌日遺体とともに帰ってきた。この時が患者輸送の第一号でした。

開業の産婆さんより、分娩の婦人が紹介され入院し、すぐ帝王切開術をした。四千グラム近い女の赤ちゃんで、自然分娩では到底困難だったと思いました。新しい命の確生で、先生が命名までして下さった。母子共に経過もよく退院された。先生は久留米に帰られて間もなく那覇市内の与儀に、大きな病院を開設され、与論の診療所は、いつもご無理を申し上げて、患者を受け入れて頂いたものでした。現在も相変わらずお世話になっていきます南島開発の製糖終了祝いで、先生は自分の出身地の沖縄の歌を歌い、みんなに喜ばれ大変親しまれた。

三十四代目西村直所長、昭和四十一年七月より約四カ月。入院患者三十八名、手術患者三十二名、帝王切開一名。夏場だけ、脇坂教室よりも一名応援に見え、お二人で昼夜勤められ、幾分か精神的にも楽になり手術も相談しながらでき、看護婦も随分楽になったものでした。先生はその後、大牟田に開業され与論の人々が随分お世話になった。

三十五代目川添有二所長、昭和四十一年八月より二カ月。入院患者三十八名、手術三十二名、帝王切開一名。この期間も二名の先生が勤務され、西村先生がご一緒でした。手術もお二人でなさるし、往診や分所も交代で行われたので、時間外の患者も早く見て頂き、

本當に助かりました。

三十六代目星子哲彦所長、昭和四十一年十月より入カ月勤務され、一番長く勤められた入院患者七十二名、手術三十六名、帝王切開二名、赤痢十三名、白血病一名、紫斑病一名この年は伝染病が非常に多かつた。白血病の患者が亡くなり、先生はお一人で看護婦がアシスタントで手術された。紫斑病は時々鼻出血で入院し、その都度、新鮮血の直接輸血をした。輸血するとすぐ止血した。小学校の時から随分永い間、鼻出血して苦しんだが成長するにつれてなくなり、現在は健康になり社会人として活躍している。なお、齒科医師の浜田先生がお辞めになり、その後、後任の先生はしばらく空白でした。

三十七代目久賀興亜所長、昭和四十二年六月より六カ月、入院患者四十六名、手術二十三名、帝王切開一名。外傷性気胸の急患が入る。沖縄の家族の元へ転医、米軍ヘリコプターを要請する。米軍ヘリコプターは時間を置かずにすぐ飛んでくる。茶花小学校の校庭より飛び立ち、琉球政府病院へ転医させた。米軍ヘリ要請第三号であった。奥様がご一緒したので、先生の面倒を見て頂き、特にお食事や健康面の管理について安心することができた。

先生は旧暦十月十五日の豊年祭典の奉納相撲で、個人優勝された。職員一同と共に神社の境内で記念撮影し、その日は医師住宅で祝杯をあげた。ようやく看護婦の増加が認めら

れ、竹内そよ子、坂本ます子が入り、八名になって当直が四日毎になった。看護婦の勤務も少しずつ改善されてきた。

三十八代目牛島捷所長、昭和四十二年十一月より三カ月。入院患者二十三名、手術十六名、血友病一名。血友病患者は、度々出血して来院、その度に新鮮血を輸血して止血していたが、残念ながら若くして亡くなった。

内科の初代、米北憲武先生が昭和四十三年一月六日よりご赴任され、今までお一人で全科を診察しておられたのが、内科医が見えて常時二人で見られるようになり、随分緩和されて、先生方もくつろぐ時間ができた。内科、外科と分科し、診察室も分けて診られるので、時間も短縮されて、昼休みも休むことができ、健康的になった。

三十九代目永田輝義所長、昭和四十三年二月より三カ月。入院患者四十一名、手術患者三十六名。この年二代目歯科医杉岡正道先生がご赴任される。先生はお年を召された方でしたが、五カ年もの間お勤めくださり、内科の先生と三名で診療所も大世帯になった。

この年の四月には、麦屋僻地診療所がこれまで民家を借りて診療していたが、新しく鉄筋コンクリート建ての分所が、「麦屋僻地出張診療所」として木の香も新しい分所ができた。

四十代目岩井健次所長、昭和四十三年五月から三カ月、入院患者四十六名、手術患者

三十九名。腸閉塞症患者と先天性異常の新生児二名を、それぞれ米軍ヘリを要請して、那覇政府病院は転医させた。ヘリ要請五号と六号であった。

四十一代目山崎一城所長、昭和四十三年八月より六ヵ月。入院患者五十八名、手術患者三十八名、赤痢三名。診療所のベット数は十九床だが、伝染病棟ができてから患者は一年中切れることがなく、一般の患者ともに二十名前後は入っていた。入院患者は自炊しなければならず大変であった。

医療機関は診療所だけで、益々入院や手術が増えるに従い、給食も必要になる。手術後の食事の管理は特に大事である。この年の九月十二日より給食が始まり、患者は勿論、付き添いの家族も大変喜んだものでした。給食の献立表は私が一週間分ずつ作り、給食作りは、福島光子と谷山裕子をお願いした。初めは手さぐり状態だったので大変でしたが、慣れるに従い軌道にのったものでした。また十二月には三百ミリのレントゲンが新設された。これまでとは違い画像が鮮明になり、大いに診断に役立った。レントゲン技師は不在のまままで男性の事務職員が担当するようになったが、やはり看護婦も撮影に携わるのは依然通りであった。経験を重ねた看護婦が、透視したり現像したりしてできた写真は、先生も驚かれるほどの出来栄えだった。特に、久留泰と山下信子は上手だった。

四十四代目田中義博所長、昭和四十四年一月から六ヵ月。入院患者百五十六名、手術百

二十名、破傷風一名。病室は殆ど満床であった。一カ月平均二十名の手術があり、いつも材料造りに追われていた。午前中は外来が多く先生方三名で診られても、終わるのが一時頃で、午後もそれぞれに往診と分所へ出張するので、材料造りは時間外となる。この頃になると電気、水道が使えるようになったのでよかったが、洗濯は洗濯機がないので、みんな手洗いだった。雨が続くと手術衣を乾かすのに、何日も掛かり大変であった。

時間外に若い男性が木工所の機械で、左前腕を切断して表面の皮膚が僅かに三センチほどついているのをそのまま抱えてきた。神経も骨も切断されて機能不能なれど、外見だけでも腕があつた方がよいからと、切断しないで継ぐ手術をされ見事に成功した。

診療報酬は多くても月四十万前後だったのが、この月初めて七十万を越す金額になった。みんなで頑張った結果だと思ふ。現在のような機械に頼る事無く全てがみんなの労力の賜であり、嬉しかった。

先生は退院する患者を全て写真に収め、記念に渡して喜ばれていた。先生はいつも朗らかで忙しいときもむしる張り切っておられ、多くの思い出を残された。久留米へ帰られてからも、与論のことが気に入り、愛してくださり、那間地区の海岸近くに別荘を建てられた。現在は福岡で開業されお忙しい中を、寸暇を裂いて来島されては、昔なじみの皆さんと、楽しく夕べを語り合いながら、現在では全く考えられない、苛酷な勤務をよく乗り越

えたと、思い出を語り合っています。

先生は月下美人の愛好家で、与論から福岡へ持ち帰って、NHKで全国向けに放送された。先生は、ご家族でこよなく与論を愛し、与論の人となり、私どもにとって大変嬉しいことでもあります。

四十三代目能美博所長、昭和四十四年七月よ五ヵ月半、入院四十四名、手術三十名。

この頃になると職員も増えて出入りも激しくなり、当初は先生を入れ十二、三名ほどでしたが人数も増え、二十七名を数えるに至る。この年、看護婦の杉美智子、竹内そよ子、白尾のり子三名が、結婚のため退職したが、後任に竹フサ子、山下秀子、入来ミツエが採用された。

四十四代目、八塚宏太所長、昭和四十四年十二月より三ヵ月。入院二十八名、手術十三名、破傷風一名。四十五年に入ると日本の最南端の島として、観光客が来島しはじめ、夏には沢山の観光客で賑わうようになった。この年、患者を名瀬の巡視艇を要請して県立大島病院に転送した。これ以来名瀬の巡視艇を要請することが多くなった。

四十五代目岩崎桂一所長。昭和四十五年三月より三ヵ月、入院三十二名、手術二十一名。観光客も多くなってきた。先生は家族同伴で来島されたのでよかった。

四十六代目甲斐田滋所長、四十五年六月より三ヵ月、入院五十名、手術二十一名、腸閉

塞症の患者がでたため、巡視艇さつまを要請して、沖永良部の開業医へ転送し、田中が介添えた。谷山瑞枝が採用された。

観光客の若者が、真っ白い砂浜で灼熱の太陽を浴びて全身を焼き、無防備でしかも無茶な楽しみ方をして、脱水症状を起こして担ぎ込まれたり、全身真っ赤に灼いた皮膚は水泡ができて腫脹し、入院するのが多くなった。灼けつく熱さに患者の苦痛は極度に達する。島内では製氷が少なく自由に使えず、湿布で冷やす程度で苦痛はなかなか和らげない。患者はあまりの苦しさに製氷室に入りたいともらす。輸液施行追加、湿布交換、昼夜を問わず徹夜の看護が続く。夏期だけではなく、冬も正月を与論で過ごす観光客が多く、まさに観光ブームであった。

四十七代目平山長一郎所長、昭和四十五年十月より六ヵ月。入院四十四名、手術二十七名、出血性胃潰瘍一名。産婦人科の前置胎盤の患者を、米軍へりを要請して沖縄へ転院させた。

四十八代目石橋秀明所長、昭和四十六年四月より六ヵ月。入院八十四名、手術五十名。久留米大学より脇坂順一教授の三日日のご来島を頂く、随員として本松助教授と近準一先生が来られ、六名の手術を行う。胃潰瘍二名、腸管癒着剥離術、胆嚢摘出術、穿孔性腹膜炎、ソケイヘルニア根治術・陰嚢水腫根治術。

今回より循環麻酔器による全身麻酔で手術を行う。近準一先生が麻酔を担当し、脇坂順一教授と本松助教授の二人の執刀で大学病院並の手術であった。脇坂教授の来島も三度目を迎え、私どももお迎えする準備にも慣れて、前処置も万全を期して手術にのぞむことができた。緊張しながらも、余裕もでて、経験を積み重ねたことも喜びである。教授先生は私どもスタッフ一同変わらぬ顔触れに笑みをたたえながら声を掛けて下さった。手術は午前九時の執刀に始まり、午後四時過ぎに終わり、各自を病室に移し、近先生の術後の指導で次々に処置をしていく。

その日の夕刻には役場職員、議会議員、診療所職員一同で送別会を行う。ご馳走はいつものごとく、海の幸を盛り、教授先生は、珍味をことのほか喜ばれ、宴の後、乗船までの間しばらく休んで頂き、乗船には舳にて沖待ちの照国丸で久留米へ帰られた。

四十九代目、岩井輝臣所長。昭和四十六年十月より三ヵ月。入院二十二名、手術十六名。久留米大学脇坂外科より、福光高德先生と助手として林先生が来島され、二名の胃潰瘍手術を施行され、翌日帰られた。この年巡視艇さつまにて名瀬に二名の患者を移送した。

五十代目中村征規所長、昭和四十七年一月より六ヵ月。入院五十名、手術三十二名、内科医の米北憲武先生が三月いっぱいまで辞められ、後任に西立野先生がみえられた。また歯科医の杉岡正道先生が辞められ、後任に林先生が赴任された。この期間米軍ヘリにて患者

三名を転送した。

五十一代目根井宏所長、昭和四十七年七月より四ヵ月。入院五十八名、手術三十名、赤痢十二名。この年の五月に沖繩が日本に返逢され、米軍へりを要請できなくなり、自衛隊のへりを要請して患者二名を運ぶ。これが自衛隊要請の第一号である。

五十二代目酒井清太郎所長、昭和四十七年十二月より四・五ヵ月。入院五十名、手術三十一名で。自衛隊へりを四回要請して、患者四名沖繩へ運ぶ。

五十三代目田中恭武所長、昭和四十八年四月より三・五ヵ月。入院四十八名、手術二十六名。自衛隊へりを四回要請して、患者四名沖繩へ運ぶ。

五十四代目橋本憲三所長、昭和四十八年七月より三・五ヵ月。入院四十八名、手術二十名。内科医の西立野先生が退職され、後任に金光七先生が来られた。自衛隊へりを七回要請して、患者七名沖繩へ運ぶ。

五十五代目米光一明所長、昭和四十八年十月より四・五ヵ月。入院二十八名、手術十三名。自衛隊へりを四回要請して、患者四名を沖那覇へ運ぶ。先生のご家族一同が来島され当時の職員一同で歓迎会を行った。

五十六代目納富昌徳所長、昭和四十九年二月より三ヵ月。入院患者二十四名、手術六名。自衛隊へりを四回要請して、患者四名を沖繩へ運ぶ。

五十七代目竹内清亘所長、昭和四十九年五月より一・五ヵ月。入院に十六名、手術十五名。自衛隊へりを二回要請して、患者二名を沖繩へ運ぶ。この年、与論空港が開港して、へりコプターは空港より初めて飛び立った。

五十八代目半井一郎所長、昭和四十九年六月より三ヵ月。入院六十一名、手術十七名、脇坂順一教授が、来島され、助手として宮嶋先生が随行された。乳癌と頸部リンパ腺腫摘出術をされた。脇坂順一教授は翌日船便の都合で、グラスボートを貸し切り、沖繩經由で帰られた。

五十九代目千葉武彦所長、昭和四十九年九月より三ヵ月。入院三十名、手術十四名。自衛隊へり一回要請して、患者一名を沖繩へ運ぶ。

六十代目甲斐田徹所長、昭和五十年一月より一ヵ月。入院六名、手術二名。

六十一代目則松俊一所長、昭和五十年二月より一ヵ月。入院十二名、手術四名。自衛隊へり六回要請して、患者六名沖繩へ運ぶ。

六十二代目脇坂愛一郎所長、昭和五十年三月より一ヵ月。入院十名、手術九名。愛一郎先生は、脇坂順一教授の長男で、久留米大学からの与論への医師の派遣は、これが最後でした。

脇坂順一教授は、昭和三十二年より十八年間の長い間、診療に一日の空白もなく医師を

派遣して下さった。先生のご配慮を忘れることはできません。当時の与論島は、電気、水道、ガスもなく苦しい状態で、特に医療面においても大変でしたが、久留米大学から派遣された先生方が尽くされた功績は、与論島民として忘れてはならない歴史として残るものです。脇坂教授も久留米大学の医師の手を借りなくても大丈夫と判断され、六十二代をもつて派遣を打ち切られたのではないかと、私は思います。脇坂教授のご寛大な心で与論島を救って下さったことに、心よりお礼申し上げたいと念ずるものであります。

その後は、金光七先生が診療所長として引き継がれ、鹿児島大学第二外科より約二年間派遣をお願いし、お世話になった。

昭和五十七年六月三十日付けで、約二十三年間勤めた与論町立診療所を定年退職した記念に、思い出して書き留めることにしました。

私たちのルーツを考える

竹内 浩

一くらしの始まり

私たち与論人の先祖ははたしていつ頃、どのようにしてこの島に住みついたのであろうか、この時期、自分達の先祖のルーツを考えてみるのも楽しいことではないだろうか。

小生は、与論町誌をはじめとするいくつかの文献をめくりながら、小生なりの想像をめぐらしてみることにした。

町誌には、「今から三千年ぐらい前から、この島には人間が住んでいた。」と書かれている。今から三千年前というと、西暦BC千年頃ということになる。これは、縄文時代（BC一万年～BC三百年頃までをいう）の晩期ということになるが、その頃東区のヤドンジョウや、茶花のイチョーキ（ヤドンジョー遺跡とイチョーキ長浜貝塚から沈線文土器の破片出土）の近辺に縄文人が生活していたということになります。更に、上城遺跡の出土物を見ると、BC三世紀から西暦二世紀頃にかけての遺物が数多く出土しているし、メーサフ遺跡や、ネツエー遺跡の出土物からは、木之下井や、インジャ井にかけての地域にも弥生時代から琉球のぐすく時代にかけての、人間の生活があったことが想像されるのであ

る。更に、これらの遺出物が沖縄北部の茅打パンタ遺跡や宇佐浜遺跡等と深くつながることや、ハケビナ遺跡をはじめ与論のこれらの遺跡が、島の南東部から、南西部にかけて島の南側、沖縄北部を望める地区にあることなどから推察するに、この頃の与論が、沖縄北部との交流が盛んに行なわれていたことが知れるのである。

さて、これらのことを念頭に置きながら想像をめぐらしてみよう。

縄文期中期頃までに、本土から南下し、奄美の本島や徳之島、そして沖縄本島などの大きな島々に渡ってきた縄文人達のうち、沖縄北部に住んでいた一部の人たちが、BC千年頃に与論島の赤崎海岸とイチョーキ長浜に上陸し、ヤドンジョーや、ウプインジュ近辺の水辺を頼りに生活を始めたのではなからうか。そして、弥生中後期、更には時期ははっきりしないが、その後の島への米作りの伝播に伴い、木之下井やインジャ井を中心にした地域、そしてウプインジュやハケビナ等、水の豊かな地域一帯に米づくりを営む人達の生活が広がっていった、と考えるのはごく自然のような気がする。

一一 与論島の名称は十五世紀には存在した

与論町誌の巻頭には、『「ゆんぬ」と「与論」』という表題を設けて、その名称の起こりについて色々と記述している。

そこには、「奄美大島史」や「大日本地名辞典」「中山伝信録」等からの引用として、『現地ではユンヌと読んでいる。古くは由論（ユロン）とも書き、支那人（明人）は奴（ユウヌ島）と言っていたが誰の説なのかは未だ判明されていない。』というような記述にとどまっている。

又、琉球の十六世紀から十七世紀に記された歌謡集「おもろそおし」には「かみふた」という名称で与論島のこと記されている。更に町誌には、『十六世紀の初期に初めて琉球王から世之主として与論に派遣された人の名をとって与論としたのではないか。』というようにも記されている。

そこで私はこれら与論町誌にも記述されていない「与論」の字が、これより更に古い時代から琉球では存在していたことを述べてみたい。

琉球第一尚王朝五代（尚巴志かち数えて）の尚金福王が千四百五十三年に朝鮮に派遣した道安によって朝鮮に献上した「琉球国之図」なる地図には、国頭の北方海上に「大島」「鬼界島」「度久島」「小岐恵羅武島」とともに「輿論島」の名がはつきりと印されている。喜界島や徳之島、沖永良部島が現在とは違った字をあてているのに、輿論だけが「輿論島」と記されているのが印象的である。

当時から輿論では「ユンヌ」と呼ばれていたこと、又、中国から琉球に渡ってきた当時

の明国からの使者たちが「ユウヌ」と発音し、「奴」の字をあてたことも理解できる。

三世紀の中国の歴史書「三国史」の「魏志倭人伝」でも分かるように、古代の中国は自国を「中華」と呼び、それ以外の国は全て「蛮夷の国」であった。「魏志倭人伝」には当時の「倭国（日本国）」の中の諸国の名称を記すのに「奴国（ナコク）」、「狗奴国（クナコク）」、「鬼奴国（キヌコク）」等と奴隷の奴の字をあてていることから分かる。

「ユンヌ」を「ユウヌ」と聞いて「奴」の字をあてたのはその為であろう。

しかし、当時の琉球国が地図の上とはいえ、「ユンヌ」を「輿論」としたのは何故だろうか。当時の言語発音が「ユンヌ」も「ユーヌ」も「由論（ユロン）」も同音のように聞き違えをほどに似ていたのであろうか。

「ユンヌ」|| 「由奴」 || 「由論」 || 「輿論」。やはり結論は出てこない。なぞは益々深まるばかりである。

なお、「輿論」の「輿」が「与」の旧字体であることはご承知の通りである。

シミヤール墓とクジリの話

内 喜美村

シミヤールの墓は、昔、昔の古代から、グシヨウヌ（あの世の）役場といわれた。シミヤールの洞窟は手堀で、入口は四ヶ所に別れている。昔の役場らしく、石垣がきれいに積まれている。古代人の仕事ぶりに感心させられる。

シミヤールの墓のかしら（主）は、ナピという女だった。ある年、ウービヤイ（大早魃）があった。大変な水飢饉で神様にあげる「水の初」さえなかった。

メーバルヌ（前浜の）かしら（主）は、ウトウと言う名前の女だった。ウトウが、シミヤールのナビに、「ニユブヌ ミー アミブラシ（ひしゃく一杯の雨を降らしなさい）」と言った。ナビは、「ニユブヌ ピー アミブラシ（ひしゃく大の雨を降らしなさい）」と聞き違えた。つまり、「ミー」を「ピー」と聞き違えたわけである。それで与論に大粒の大雨が降って那間方面が大変な水浸しになった。ウロー（丘陵）が堤防になって水がせき止められて池になってしまった。その水を海に流し出さなければならない。その水のはけ口としてくずれたのが、大金久のクジリで、「クジリ」の名前はそこからきたのだそうである。

シミヤーでは、ナビというものではないと聞かされてきた。私の祖母から聞いた話である。

ミンキヤーマシ

白石 直利

昔の人から聞いた話。ピヤーンヌパンタのヤグラバンタ（ドライブイン道の道向かいの山の上）とトウグラ山とサーシ大石（うぷいし）とウワーナンディ石と四ヶ所を結んで、デイン（青白い光）が飛び交うことがあったとのことである。

サーシ大石の北側の田（今は黍畑で二反歩程ある）をミンキヤーマシという。その次の田をトウンギマシと言いきらにその次の田をトリーリマシという。

この名前の由来は、その昔、キンダ（家人）が怠けて仕事をしない、言い付けも聞かぬのに、主人が腹を立ててキンダの耳を切り落としたとのこと。耳を切った田をミンキヤーマシ（耳を切られた田）といい、びっくり仰天して飛び跳ねた田をトウンギマシ、そして倒れた田をトオーリマシと言うようになったとのこと。

サーギマートウイは、剛力無双で知られた豪傑である。サーギマートウイが、力試しに持ち上げたという石（数トンはある）がサーシ大石の上ののっかかけられている。

サーギマートウイが、ある日、八名の者と、大鍋一杯の昼ご飯をかけて、稲刈競争をした。稲を刈るのは八名の方が早かったが、稲を畦まで運び出す時打なって、八名は担いで

運び出したが、サーギマートウイは、稲束を右に左にぼんぼん投げて出したので、サーギマートウイが勝った。

サーギマートウイは大鍋のご飯を食べ始めた。八名の者は、全部食べられてしまふと自分たちのものがなくなるので、分けてもらおうとした。すると、サーギマートウイは大鍋を小脇に抱えて逃げながら、サーシ大石のまわりを三回回るうちに全部食べ尽くしてしまつたとのことである。

ウワーナンデイ石は、道路拡張のため割られて小さくなつたが、以前は大きく、その上に子供たちが乗つて遊んでいた。また、夜になるとそのそばで、きれいな娘の幽霊が、糸車を回していたそうです。さらに、その付近はウワームヌ（豚の幽霊）が出るところで、ウワームヌに股をくぐられると死ぬと恐れられていたそうです。

今は昔の物語である。

ウテイ

イシ

落石

白尾 康美智

かつて、私たちの先人達が正月のハミゴ遊びで賑わったという名所の一角に、海辺から聳え立つ巨大な岩がある。一見、何の変哲もない大岩だが気をつけて見ると、この岩が上の方からちぎれて落ちた事がわかる。落石（ウテイイシ）と呼ばれている。小生の父がその祖母から聞いた話によれば、この石が落下した時はちょうど昼食の準備時で、大地震響きがして竈の火が一瞬打ち消したように消えたそうである。この地響きは沖繩の首里まで届き、早昼のご馳走をとっていた王様は敵が攻め込んだのかと驚き、持っていた井を落として割ってしまったそうである。これは曾祖母の体験ではなく、聞き継いできた話だと思われるのではっきりした年代はわからない。また父は与論島の有史以来島民が体験した大きな地震ではなかったかとも言っていた。

郷土が生んだ、元鹿児島県立奄美図書館長栄喜久元氏の著書「続奄美風土記」ふるさとへの回帰第4章 島の名山シゴのパンタには次のように記されている。「あの岩が崖の上から落ちたとき首里の王様はその地響きに驚き、与論島に使者をおくって調べさせたそ

うだと語った父の話も耳に残っている」と結ばれている。

ともあれ首里まで響いたとは大げさなような気もするが、情報伝達機関の無きに等しい時代にはきつと大きな事件だったに違いない。差し詰め今の世なら与論島で原発事故が起きたくらいには匹敵するのではなからうか。もし落石事件（騒動と呼ぶべきか）災害時の火の用心と、はたまた早昼のご馳走を饗していたという首里の王様の奢りへの警鐘ではなかったかなどと妄想する。

因みにこの岩は、本畑敏雄氏の所有地（岩？）で岩の上にはアコウ・ガジュマル・ソテツ・トベラ等の灌木が生えていて、登ればオーダの二杯分の牛草が刈れるそうだ（本畑実氏談）。周辺一帯では少年たちが杭打ち遊びに興じ、若者達が一重一瓶を持ち寄り、晴れ着とありつたけの芸を競い、青春時代の一大遊興を展開した浮島型の草原は舗装道路に変わり、往時の栄華を偲ぶよすがはもうない。ただ、天地のなせる業でちぎれて落ちたこの岩はかつてはこの地で歌い踊り、青春を謳歌したであろう先祖様が鎮まるシミヤアのジシ（納骨穴）を背景に、恰も人間たちのはかない望みを背負っているかのように、遥か彼方のニライ・カナイの悠久の海をじっと見つめ続けている。

平成十二年十一月二十五日

鉋山物語

竹下 徹

私が小さい頃、ガギヌにウイグスク鉋山があった。露天堀ですり鉢型だった。子供の目だったからか、すごく深くて大きかった記憶がある。事実その穴に滑り落ちた人がいて、牛の鼻を通す綱をつなぎ合わせて、それを握らせて引き上げたこともあったときいた。

その穴の中腹に大きなアングルイ（パンジロウの実）が実っていたが、よだれを垂らすばかりだった。今はその鉋山はうめられて畑になり、跡形もない。当時中心になって掘った、市来頼利さん、谷山福実さんはすでに亡くなられ、記憶も薄れていくので記録に残さうと思い、現在お元気で、当時関係した方々から聞き集めて綴った。

与論で掘られた鉋石は、燐鉋石で、肥料用だった。与論島は隆起珊瑚礁からなる島で、太古の昔は、海鳥が翼を休め卵を産む無人島だった。その時の海鳥の糞が囲まってきたのが燐鉋石である。あるところは、雨でその糞が、アブ（鍾乳洞）へ流れこみ鉋脈状になっているところもあり、それを掘り進め、横穴状になったところもあった。

鉋山は次の六箇所あった。

ウイグスク鉋山（森盛茂氏宅南側）

ドウイギョウ鉤山（山下金幸氏宅東北）

増木名鉤山（町元按司雄氏宅付近）

ヤグラ鉤山（県道下及びよろん焼付近）

東与舎鉤山（谷山実氏宅と清掃センターの間）

フブ舎鉤山（農協集荷場西隣）

鉤山の掘り方は、石の表面にくっついてある燐鉤石をハンマーで打ち割って取る方法と手作業で石のみを使って穴をあけ、そこにダイナマイトを詰め、爆破して掘り進むのとあった。燐鉤石と馬鹿石を女性三・四名が選り分けて朝鮮カマスに六十キロづつ詰めた。

ウイグスク鉤山の鉤石は、戦前は、担いでゆ浜に運び、そこから伝馬船に積んで、茶花港で本船に積み込んだ。戦後は寺崎本道に担ぎ出し、そこから車で茶花に運んだ。担ぎ出しは、請負の場合と雇いがあった。請負は一俵当たり十一円であった。沖実藏さんは、若くて力があり、一度に二俵かつぎ、請負で稼いだそうである。掘り出し作業人夫は、通常五・六名だった。

ヤグラ鉤山では落盤事故があり、落ちてくる石の間をかき分けかき分け、血みどろになりながらはい上がり、九死に一生を得た人もいた。

市来頼利さんは、金銀宝石の鉤脈を探して、十島村から台湾の東の波照間島まで、島と

いう島は勿論、水面に出ているところは限無く、ハンマー片手に歩き回り、一攫千金を夢見たロマンチストだった。

ある時、市来さんが、「尖閣列島は、海鳥ノ島で、卵でうめ尽くされて足の踏み場もなかった。カマスを持って行って卵を捨てるだけでも儲かるのだが。島の持ち主は沖縄の女性で、島ごと買わないかといわれたが何しろ金がない。」と私の父に話しているのを聞いた。

後年父が「あの時買って置けば今頃……。領有権問題なども云々」と言っていた。与論の鉦山は、市来さんの手引きによるものだったと思う。鉦山を掘らしたのは、沖縄の東亜燐鉦石株式会社で、この会社が与論に初めて車（トラック）を走らせた。戦後しばらく、本土の神島工業がこれにあたった。その会社の与論責任者は、人夫賃を未払いにしたり、女を困ったりしていて、それが本社にばれて、茶花海岸で非業の死を遂げた。

鉦山にまつわる物語の数々は、今はほとんど土に埋まってしまった。

子抱石

(クワダチイシ)

川上 末吉

昭和十三年の夏、茶花イチョウキ海岸に飛行機が墜落した。既に六十三年もの長い年月が経過して、当時の証明になる資料がないので、確かなことは言えないが、私の記憶や周辺住民からの聞き取りで、その大要を記します。

墜落したのは昭和十三年七月二十六日から十日以内の事故であったことは事実である。その理由は、私の長男節夫が昭和十三年七月二十六日に出生し、まだ産室に入室中の事故であったから間違いない。

墜落の場所は、茶花イチョウキ海岸の通称「子抱石」。現在の与論島観光ホテル下の浜親石は波打ち際に、小石は上方に二つ並んで立っていたが、その子石に墜落して崩壊し、石も壊した。親石は現在もその雄姿を残存している。

機体の故障でイチョウキ長浜に着陸するため、東方から低空してきて、その子石に当たったのではないかと思われる。機種等不明であるが、おそらく爆撃機ではなかったかとのことである。

搭乗員は三名で、その中一名は軽傷を受けていたとのこと。墜落した機体は茶花海岸に

搬入されて、消防団員が交代で監視していたとのこと。搭乗員の三名は当時の池上旅館（茶花池上ウモダ経営）に宿泊していたとのこと。場所は現在の基ストアー倉庫付近であった。その後、搭乗員の三名と墜落した機体の輸送等については、確実な資料がないのでわからない。

平成十二年四月三日記

竜宮亀捕り物語

大角 龍矢

前浜の東側沖合に、竜宮城へ浦島太郎を乗せて行ったという伝説の亀石がある。ちよつと北風はあつたが、天気の良い日に、亀石の南側沖三十メートル、水深二十メートルほどの所に錨を下ろして、魚釣りをしていた。

時は午前九時頃、夏の太陽が射していた。沖縄の方向五百メートル程の所の海面上に黒いものが見えた。「ブイが浮いているな」と思っていたが、間もなくしたら見えなくなつた。二、三分してまた見えた。何だろうかと思ひ、立ち上がつて見た。間もなくしてまた見えなくなつた。変だなとは思ひながら、魚のあたりを待つていた。乗つてゐる私の舟は長さ四メートル程の手こぎのくり舟だつた。また見えた。しかも近くなつていた。北風なのにブイなら寄ってくる訳けはないがと思ひながら見ていた。

百メートル程の所に来たときに、亀であることがやつと分かつた。こちらに近付いてくる。これはまたおもしろいこともあるものだと思ひながら見てゐると、やはり近付いてくる。二、三分浮いたかと思ふとまた沈みながらである。

とうとう二十から三十メートル程まで来た。いよいよおかしい。よほど好奇心の強い亀

だと見える。もう釣り糸より亀の方に気が向いた。どんなことになるのかと思ひ、身をかがめて、舟底に隠れた。ときどき舟べりから頭を出して見た。十メートルほどに近付いてきた。その時、見たこともない大きな亀だと分かった。急に胸が高鳴り始めた。

幸い底釣り大物の大きなノー（道糸）を持っていたので、大きな方で罟を作った。いよいよ五メートル程に近付いて来たときに、立ち上がった罟を投げた。何とも不思議なことに、運動会の輪投げ競技の輪が棒に入るみたいに、水面にもち上がった巨大亀の首にすぽっと入った。その瞬間亀が走りだし輪がしまった。ヒュルヒュルヒュルヒュル、引つ張っていった。どんどん縄を繰れてやった。速いこと速いこと、飛ぶがごとくであった。兎のかける速さどころではなかった。亀が遅いなんていうのは、場違いの陸上でのことであつて、ホームグラウンドの海だったら、逆に亀が昼寝をする番だと思われる。

百メートル程縄をやったら、足りなくなつたので、縄をドウギ（帆柱を立てる横板）に必死になつてくりつけた。すると舟ごと引つ張つていった。舟が引かれ、アンカーの縄がピンと張りつめた。次の瞬間、アンカーの根元から縄がボコツと引きちぎられた。想像を絶するような物凄い勢いであつた。縄はきしみ、ばさつばさつと舟べりとの摩擦音を立て、今にもちぎれるのではないかと思つた。が、手のほどこしようもなく、ほどこすすべも思ひ浮かばなかつた。沖へ、沖へ、沖繩の方へ舟は波をけたててどんどん引かれてい

った。

五百メートルも引つ張られていったところだろうか。首を絞められて呼吸困難になったと見えて止まった。しかし、それも束の間だった。また走りだした。どんどん、どんどん沖へ引いていく。そしてまたしばらく止まる。その繰り返しであった。どこまで行くんだろるか。どこまで行ったら、疲れてくれるだろうか。北風は吹いているし、島はだんだん遠くなる。日はいつしか中天になった。四十代の血気盛んなときであったから、「やるだけやってやれ」、どちらが勝つか、勝負してみようという気だった。最悪の場合は縄を切って帰ればいい、ぎりぎりの所まで頑張ってみようと思った。しかし不安はついついてきた勇猛心と命の不安感が交錯した。亀は息をしに浮いてきて、私を見るなり、また潜って舟を引つ張っていく。そのうち疲れが見えてきた。縄を手繰れば浮いてきたりした。しかしそれもほんのちよつとで、休んだらまたすぐ潜った。斜め下の方向へ潜っていく。

そうこうするうちに舟近くまで手繰り寄せることができた。しかし舟が見えるともた潜って引いていく。舟ばたまで引き寄せたら、さすがに暴れた。首をくくつてある縄はしっかりとドウギに縛り付けた。錨が切れた残りの綱は、そのまま引つ張っていたので、それで亀の胴体を舟に縛り付けた。亀の前足の後方と後足の前方をそれぞれ舟に縛り付けた。足が自由に水をかくことができるようである。あまりにも遠くへ来すぎた。一人で漕い

で帰りつくのは大変である。いっそのこと亀に漕がそうと考えた。舟と平行に亀をくくつてあるので、今までとは反対向きに、島（前浜）の方に向けた。すると亀が舟もろとも漕いでくれる。

いつしか一時過ぎにはなっていただろうか。浦島太郎よろしく、左足は舟の上、右足は亀の背に立ち、今度は叱咤激励である。「漕いでくれ、漕いでくれ」応援である。大海原に、巨大亀と二人。亀はおとなしく、陸に向かって泳いでくれる。勝ち誇った気持ちであった。格闘の相手であった亀が、今度は自分を陸へ連れてくれる。有り難いものだと思うとともに可愛くなってきた。頭をなで励ましながら、ピシバナ（リーフ）に近付いた。

ところがピシバナに近付き、水深二十ないし三十メートルで海底が見えるようになったら、亀が沖の方向へ向きを変えてしまった。ヤフ（舟を漕ぐかい）で亀を脅し、舟をあやつり、やっと陸の方向へ向きを変えたかと思うと、また、亀が沖へ向きを変えてしまう。ヤフで亀をたたき、声をかけながら無理矢理変えても、亀がいよいよやをしてまた変えてしまう。その繰り返しでぐるぐる回ることになった。五、六回廻っただろうか。いやそれ以上だったかもしれない。右に左にぐるぐる回った。やっと陸に向けた。

昔は、亀捕りの本職がいた。朝戸方面からも来て、亀を捕り、肉を売ったり、剥製にしたりしていた。また、卵も取って食べていた。捕獲禁止にはなっていないかった。亀は

昼間は、海底の岩陰に寝ている。それを素潜りで、引っ掛けて取っていた。したがって、大きなものは、一人では手におえず、取っていなかった。

もう五時にはなっていただろうか。もう浜も間近だというのに、暴れていることをきかない。餌切り包丁で亀の首を突っ突きはじめた。ようやくイノー（リーフの内側）に入れた。波打ち際近くになってまた暴れだした。水深は腰ぐらいだが、どうしても浜に引き上げることができない。亀にとっても命を取られるかどうかの水際だと思ったのでしよう。包丁で首を突き、はじめたがどうしても駄目だった。

逃げられないように大きな錨に縛り付けておいてから、人を呼んできた。みんなで協力して十五メートル程浜の上の方にあげて、亀は引っ繰り返した。亀は裏返しにすると動けない。縄で縛り、四人で担ぎ、交代を繰り返しながら、やっと家まで運んだ。

あまりにも大きく、見たことがないということで、体重をはかってみようということになった。当時砂糖樽をはかる、二百斤竿秤があったので、それではかろうとしたが、とうていはかりきれなかった。

はるか遠くの海から連れ帰ってくれた命の恩人ではあったが、解体して隣近所みんな分け合って食べた。さすがに殺すときは「恩知らず」という自責の念があった。甲羅は、子供たちが水田に浮かべて舟がわりに乗って遊んでいた。

私は、今までに数多くの亀を見てきたが、今だにあんな大きな亀は見たことがない。きつと竜宮城とやらの亀王だったんだろうと思ったりする。

物は貧しかったが、自然は豊かで共々共生して生きていた時代の実体験物語である。

平成七年一月記

プカ捕り物語

竹下 徹

イカとカマス釣りに、ハニ兄と行った。

品覇の約五キロメートル沖合に碇を降ろした。カマスの釣れる場所は決まっていて、漁師それぞれ独自の漁場がある。沖縄と与論を基点にして三角測量法で、その場所を見定めて、碇を降ろす。碇は大きな石で、重さ十五ないし二十五キロのものが使われる。わら縄でくくり、二メートルほどのわら縄を先縄とする。それ以後は本縄である。場所を移動したり、漁が終わって帰るときには、先縄のわら縄の部分を引きちぎる、いわゆる使い捨てにするための知恵である。

この日もハニ兄の命令に従い、私が碇をドボンと落とした。すると縄は飛ぶように繰り出されていく。途中で縄が引っ掛かったりすると慣性の法則でわら縄の部分からきれてしまう。石は予備を持っていかないので大変である。それにトウムヌイが目論んだ所に碇が入られるかどうか、その日の大漁、不漁が決まる大事な作業なので緊張する。

夕日が落ち、薄暮が海面をおうた。ひとしきりイカ釣りをした。上弦の月が西の空高くかかっていた。釣ったイカを餌にして、カマス釣りを同時に行なうことにした。カマス釣

りは、二又にして針を二本つけ、二百五十から三百メートルの深さに下ろす。重りがことんと海底についたのを確かめてから、数メートル引き上げてあたりを待つ。

神経を指先に集中させて魚信を待つ。雑談はしていても、神経はいつでも指先にある二匹同時に釣れるときもあるし、一匹の時もあるし、あたりを外して餌だけ持っていられるときもしはしばである。三百メートルの深海からむなで（無な手）を引き上げるのはいかにも恨めしい。

ハニ兄は、ワイヤ仕掛けの大物ねらいのかたわら、イカランプ（石油ランプ）によって来るイカを引っ掛け、忙しそうにしていた。トウムのハニ兄が一瞬静かになった。私には気にも止めずに魚信を待っていた。「トウラ 道具を巻け」といきなり命令が飛んできた。私は「何事ね？」と聞き返そうと思ったが、語勢が強いのと海では余計な口はきくものではないとかねてから聞かされていたので思い止まった。

ハニ兄が、釣り糸を力任せに引いても、シガイ（岩盤に針が引っ掛かること）したようにぴくともしないという。しかしどの程度の大物かは、ハニ兄には予想がついていたようである。やがて始まるであろう格闘に備えて、まわりを整理したり繰れてやる縄をつないだり、手にタオルを巻いたりしていた。私は何をしていいかわからず、ただ兄がするのを見ているだけだった。

案の定、引き出した。強く引くときは、糸を繰れてやらなければならぬ。ぐいぐい引いていく。「足りそうにない」、「次は碇網だ、準備しなさい」と命令が飛んできた。さすがに、兄の声がうわずっていた。舟が引かれだした。どこへ引いていくのだろう。後は相手まかせである。

上弦の月もだんだんと西空低くなつた。雲がかかると暗くなり、不安もいくぶんかつのる。兄は糸を手繰り寄せたり、くれたりの駆け引きである。舟は伊平屋の方向に引かれていった。何時間たったのだろう。月も十度の高さ程に落ちた。私は相手がなにものかをきこうと思つたが、海では余計な口を利くものではないという戒めを思い出して、口をつぐんだ。ハニ兄は、相手がなにものであるかは経験で知っていたに違いない。

さすがにここまで来ると相手も疲れたとみえて、ハニ兄の力が勝つてきた。重い碇を引き上げるように、糸を逆手に持つて引き上げていた。魚釣りの感じとは程遠く、重い荷物を引き上げる感じである。相手が引くときは、綱引きで負けて引かれていく感じである。

月は水平線近くに落ちていく。月明かりがあるうちになんとかなればいいがと兄は思っているようだった。やがて対面するであろう怪物に胸が高鳴る。手繰り寄せた糸の量でそれが間近いことがわかる。

舟べりに白い魚影が、月の薄明りで浮かび上がった。私は思わず息を呑んだ。ハニ兄は

糸をドウギ（帆柱を立てる横板）にくくりつけるために前にきた。白い魚影が舟と並んだ長さは、舟のへさきからエンジンルームまでの長さだった。およそ四メートルである。さすがにハニ兄も興奮し、あわてていた。碇綱で尻尾をくくり、頭をくくって舟に丸ごと縛る試みをしたが、舟が揺れる、相手が動くで駄目だった。相手はまだ決定的なダメージは受けていない。

兄がペーシャ（包丁）と言った。私が手渡すと、逆手に持つて脳髓目がけて打ち込んだその瞬間、尾びれを激しく舟べりに叩きつけ、大きな音とともに水しぶきがあがり、舟が大きくゆれた。兄が、「アッサー」と悲鳴のような何ともいいようのない声を出した。波しぶきがおさまるのを待つて海中を覗いたら、そこには魚影はもうなかった。ワイヤーがだらしなく垂れ下っていた。

兄はため息をつき、「チュムチョイ」とあきらめきれない様子で、ワイヤーの先を見つめていた。緊張の糸も切れた。

ややあつて

私は、「ヌーエータラガ」と初めて怪物の名前をきいた。兄は、「オーラブカ エータン」と言った。そして「チュムチョイ」、「油ダキシ ナユクルムヌ」、「アッサアリボウ一か年分ヤアタルムヌ」とまた嘆いた。（一年分というのは、舟に塗るフカ油のことである）兄は、しばらくの間放心状態であった。月も水平線に沈んだ。兄は漁を続ける気力

を失い、「デー ムデイラン」と言つて立ち上がり、エンジンを掛けた。

浜に上がつてから、私は兄に、「あれは逃げてよかつた。舟に括り付けでもしていたら
もろとも引つ繰り返されていたらう。ヌチドウ アタラシクエール」と言つたが、兄は
無言だつた。漁獲はほとんどなかつたが、家路の足はことのほか重かつた。

これは決してユクプカ物語ではありません。